

帰牛原運動公園調査報告書

1998. 3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

帰牛原運動公園調査報告書

1998. 3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

村民の健康増進と青少年の健全育成を図り、生涯スポーツの場所として、平成7年度より運動公園整備事業が実施されました。それに先立ち帰牛原中原地籍の埋蔵文化財発掘調査が実施されました。

これは、昭和45年（1970年）より始まった農業改善事業に伴う発掘調査から出発して、喬木第一小学校・中学校の建設事業、水道配水工事等、数次の発掘調査に連なるもので、貴重な埋蔵文化財地籍として文化財保護のため実施したものです。

既に、縄文・弥生時代の住居址・土器・石器の数多くの出土をみています。今回も縄文時代の中期後半の集落・弥生時代後期の方形周溝墓群、環濠が発掘調査されました。

これにより帰牛原遺跡群全体の集落構成に更に広がりを加えた訳で、その成果と意義は大きいと考えられます。私達の古代へのロマンに一層のふくらみができたといえるでしょう。

今回の調査と、調査報告書の発刊にあたり、佐藤聰信先生をはじめ、調査員・作業員・地元関係者、他ご協力をいただきました各位に厚くお礼を申し上げ、序文といたします。

平成10年3月

喬木村教育長 宮下周一

例　　言

1. 本書は、平成8年帰牛原に村営運動場とともにともなう公園の建設による発掘調査を長野県下伊那郡喬木村教育委員会が実施した報告書である。
2. 本書は、資料提供に重点をおいて編集したものであり、編集は佐藤が担当した。
3. 本書は、昭和45年（1970）以降、平成9年（1997）の27年間に9次にわたる発掘調査・立合調査結果を含めて、帰牛原遺跡群の総合的なまとめをなした。
4. 遺構実測図作成は佐藤・田口が、遺物の作図は佐藤が、製図は田口が分担し、写真は佐藤が担当した。
5. 遺物は、喬木歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

序	2
例 言	3
目 次	4
I 環 境	5
1. 自然的環境	5
2. 歴史的環境	8
II 経 過	10
III 調査結果	12
(I) 住居址	13
1. 縄文中期後葉住居址	13
2. 弥生時代住居址	36
3. 積穴址・土壤	37
(II) 方形周溝墓	38
(III) 水 田 址	43
IV 環 濠	44
V 地形的に見た帰牛原遺跡群－弥生時代造構の分布を中心とした	52
図 版	53
調査組織	61

I 環 境

1. 自然的環境

帰牛原中原遺跡は長野県下伊那郡喬木村帰牛原に所在する。

長野県飯田・下伊那地方は東に赤石山脈、西に木曽山脈が連なり、その中央を天竜川が南流し、両岸に河岸段丘が発達しているのが伊那盆地である。天竜川の東岸一竜東地区は背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が北から大西山(1741m)・鬼面山(1889m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちらながら段丘面が発達し、天竜川の氾濫原へとさがっている。

天竜川の西岸一竜西地区に比し、山麓からのびる扇状地は狭小で幅員も全体的に狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘面の発達は著しく、特に北から豊丘村の田村原・伴野村、喬木村の城原・帰牛原・上平・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く中位段丘面の幅は広く、典型的な段丘を形成している。

遺跡のある帰牛原は、東西方向に連なる段丘で、標高490~535mの伊那谷洪積中位段丘に位置づく。北から西側は比高70m前後の段丘崖となり、北の崖下には加々須川が流れ、西は天竜川の氾濫原をのぞみ、南は小川川の支流鞍馬沢が流れ、深い谷となり、川との比高35~77mに達し、段丘形成後の浸蝕が盛んであったことがわかる。東方は伊那層よりなる丘陵となり、その一部が十万山として南側の鞍馬沢に沿って西にのびてきている。丘陵地と段丘面の東西は1700m、南北の最大は、550mを測り、台地の中間部はくびれて狭くなり、南北220mとなる。このくびれ部の北東淹ノ沢の崖頭浸蝕による深い谷によって切られた舌状台地に城本屋遺跡があり、くびれ部の東一城本屋より十万山西裾の東側は一段高位の扇状地を形成し、水田化している。十万山の西裾には帰牛原遺跡の十万山地区がある。くびれ部西の中央部はやや低地帯となって東西に走り、その先端部は崖頭浸蝕による深い谷となり、南原と中原に分けている。南側は帰牛原南原遺跡、北側は帰牛原中原遺跡となっている。

この低地帯は淹ノ沢の崖頭浸蝕進行前は、東方の丘陵地帯よりの湧水の流路をなしていたものと推定される。城本屋遺跡の発掘調査によって集落の南端の繩文中期後半末の住居址が淹ノ沢の氾濫によって切られていることが認められており、それ以後の流路の変化と思われる。帰牛原遺跡における集落は、この低地帯をはさんで展開されている。

帰牛原には城本屋・十万山地区・中原・南原・北東地区と遺跡はあるが、同一段丘上に立地し、関連しあう遺跡であり、帰牛原遺跡群と総称することが妥当である。(第1図-A)

中原遺跡は、帰牛原段丘面では最も広く、南北幅は西端部が最も広く400m、東はくびれ部となつて80mと狭くなり、東西幅900mの三角形状をなし、帰牛原中央部の東西方向の低地帯を境して南は南原となる。(第1図-A)



第1図 A 堀牛原遺跡地形図及び周辺遺跡図 (1 : 15,000)



- | | | | | |
|--------------|----------|----------|---------|---------------|
| 1 畠牛原遺跡 | 2 馬場平遺跡 | 3 伊久間原遺跡 | 4 阿島遺跡 | 5 阿島郭遺跡・郭1号古墳 |
| 6 伴野遺跡 | 7 林原遺跡 | 8 林里遺跡 | 9 田村遺跡 | 10 北原遺跡 |
| 11 恒川遺跡 | 12 霧彩寺古墳 | 13 寺所遺跡 | 14 清水遺跡 | 15 地神遺跡 |
| 16 大原遺跡・富田窯址 | | | | |

第1図 B 伊久間原遺跡位置図及び周辺の主要遺跡群 (1 : 50,000)

2. 歴史的環境

帰牛原遺跡群の調査は、今次調査前に8次の調査が行われている。

第1次調査は昭和45年（1970）、農業構造改良事業の一環として、中原・南原に農道開設に伴う調査が行われた。南原十万山地区で縄文中期住居址2軒・弥生後期住居址1軒、弥生中期寺所式土器を伴う土壙1基等が検出された。

中原地区では方形・円形周溝墓各1基が調査され、注目された。

第2次調査、昭和47年（1972）、喬木第一小学校建設に伴う調査で方形周溝墓5基・縄文晚期かとみる住居址1軒・土壙1基を検出した。

第3次調査、昭和51年（1976）、農業構造改良事業に伴う発掘調査が城本屋遺跡で行われ、縄文中期後葉Ⅲ期を中心に、中期末等の中期住居址45軒、縄文後期3軒、弥生中期2軒、平安時代1軒の大集落が切りあい重複して検出され、さらに用地外の北と東に住居址の存在が予想された。

第4次調査、昭和52年（1977）、十万山地区的農業構造改良に伴う発掘調査が行われ、縄文中期中葉末住居址8軒、弥生後期住居址5軒が検出され、弥生9号住居址床面より銅鏡の出土は注目された。

第5次調査、昭和54年（1979）、小学校よりの道路を北に中央部の低地帯を越えた東側に水道貯水タンク建設がつまり、その発掘調査。円形周溝墓1基の2分の1が検出されたが、東側は調査不能であった。

第6次調査、昭和55年（1980）、小学校・中学校用地内・城本屋地域を除き、帰牛原西側畠地帯全域に烟灌水工事が行われ、これに伴う立合調査が実施された。その結果、以前調査された分を含め住居址では、縄文時代は中期後半を主に前期・中期・後期・晚期？計104軒、弥生時代中期2・後期38の40軒、古墳時代住居址はなく、現存古墳1、消滅古墳1墳がある。平安時代1、中世3軒の住居址総計148軒。土壙25基あり、縄文・弥生・中世がある。

方形（円形）周溝墓は段丘西端部近くから東約400mの間に、南原に5基・中原に34基、計39基が検出されている。

第7次調査、昭和56年（1981）、中学校建設に伴う発掘調査を行う。全面桑畑で、何回もの桑の改植による深耕により荒れが多くみられた。検出された住居址は9軒・縄文後期5軒・弥生後期1軒・中世3軒と土壙1基がある。検出された遺構は深耕による荒れがみられ、遺物も散逸した状態であった。

第8次調査、平成4年（1992）、帰牛原浄化センター施設が中原北東地区に建設することになり、これに伴う発掘調査が実施された。この結果、用地面積の大部分は壁土採り場となり、北東隅の用地境に接し、住居址1号を検出。出土土器は小片で僅に残る文様からみて弥生後期座光寺原式とみられた。

1号住居址の張り床の下に2号住居址が検出された。炉址は中心よりやや南北によってあり、地床炉で焼土は著しい。土器片は1片のみで底部近くの破片とみる。住居址の形態からみて弥生中期末の住居址とみる。

帰牛原周辺の主要遺跡を概観すると、北の崖下には郭遺跡があり、平成4年（1992）老人ホーム建設に伴う発掘調査で住居址17軒が検出され、特に17号住居址は弥生前期初頭にみる「遠賀川式の壺」の出土をみ、下伊那地方では豊丘村林里遺跡出土の壺と同じであり、下伊那地方での弥生文化流入の貴重な資料とされている。また、郭1号古墳は竜東地区唯一の前方後円墳である。これに接してあった郭2号墳は消滅しているが、多くの馬具の出土をみている。郭より帰牛原へのぼる段丘崖中腹にある郭5号墳より完形の朝顔形円筒埴輪、円筒埴輪の出土をみている。

郭遺跡の北、加々須川を越えた天竜川の氾濫原に近い冲積段丘面には阿島遺跡があり、弥生中期の阿島式土器の標準遺跡として知られている。また、加々須川を越えた北の帰牛原と同位段丘の城原遺跡には城原城跡があり、共同墓地造成の調査で和鏡の出土をみている。さらに北の伴の原遺跡では縄文中期後半の大集落が調査され、パン状炭化物の出土で知られている。

帰牛原西南崖下の低段丘面には、縄文前期から弥生・古墳時代の遺物の出土は多く、里原・馬場平遺跡があり、特に里原には6基の古墳があり、その主座とみる里原1号墳よりは四神四獸鏡の出土をみている。里原の上段面よりの氾濫堆積の下に水田址が検出されている。

帰牛原の南を境する鞍馬沢を隔てた丘陵上には、松下城跡が西側にあり、また、東側には諸原十三塚が発見されている。丘陵を下ると上平遺跡があり、広域農道調査で、縄文中期中葉・弥生後期住居址8軒、方形周溝墓1基、中世建物址2棟等が検出されている。

小川川を隔てた南の同位段丘伊久間原遺跡群は、有舌尖頭器の出土をみ、縄文早期末・前期・中期・後期、弥生時代中期・後期、古墳時代前・中・後期があり、平安時代は僅かである。方形周溝墓3基が検出され、発掘調査・烟灌水工事立合調査により確認された住居址を合わせると400軒に及ぶ数がみられる大遺跡である。

伊久間原の東の上位段丘面の大原遺跡は、農業構造改良事業による発掘調査で、縄文早期・中期中葉末住居址9軒、集石炉2基等が調査され、有舌ポイント1点の出土をみた。また、東側の机山の傾斜面にかかる富田窯址があり、この調査では燃焼室が検出されたが燃成室は開墾時に破壊されていた。燃成室には江戸時代中期とみる陶片が敷かれていた。しかし、窯出土の陶器は木灰釉を施す器を主体とした江戸時代後期の窯址と確認された。

天竜川を隔てた対岸の低位段丘を北からみると高森町北原遺跡は弥生中期北原式土器の標準遺跡であり、弥生時代の磨製石器の製作址である点に注目されている。

座光寺恒川遺跡は弥生中期から古墳時代・奈良・平安時代と続く大遺跡であり、調査の進むに従い伊那郡衙とみる重要な遺跡である。

南に続く上郷地区は下伊那地方最大規模の靈彩寺古墳があり、下位段丘面には弥生時代の注目される遺跡がある。

松川を境に南の松尾地区には、弥生中期前半の寺所遺跡は寺所式土器の標準遺跡であり、これより南に続く低位段丘面には、弥生中期から古墳時代の遺跡がならぶ。(第1図-B)

II 経 過

平成8年（1996）帰牛原中原に村営運動場と共に付すいする公園の建設が決定された。中原地区は、昭和45年（1970）の農道開設に伴う調査で、方形（円形）周溝墓各1基が発掘され注目された。昭和54年（1979）に水道貯水タンク建設の際、円形周溝墓1基が検出された。

昭和55年（1980）烟瀬水工事の立合調査で、中原地区では、中学校用地中央部北を南北方向の道路の西側は、段丘西端部近くまで遺構が多く、東側は100m余の間と、中原北側の東西方向の道路北側には、遺構の発見はなかった。

このため発掘調査範囲は、西側は小・中学校の間を北に向かう道路を含めた西境より、東100mと、北を東西に通る道路より南100mの水道施設を除いた水田面を含めて調査することとした。

西境の道路は、現在幅の倍となり、この工事は運動場内工事の終了最後となるため、平成9年（1997）度の調査となる。

発掘調査は、平成8年（1996）3月18日より、水道貯水池東側の水田に接する傾斜地の畠の柿の木を重機でこぎ、用地外の畠に植えかえ作業にかかり、この後の調査をはじめる。19日に水田により弥生住居址1軒と東西方向の溝を検出する。

21日より作業員が来て、テントを北側の道ぎわに張り準備をととのえる。

（22日～25日、雨と土日で休み）

26日～29日、貯水池北東側の柿の木を切り、重機で枝を集め焼き、排土。1住掘り上げ測量。溝の西側を調査、東側は荒れ不明。東側の中央の道路ぎわで北にまがる溝を検出、二条になって北に進む。溝とみるより濠とみる。土壤1号、竪穴址1号検出掘り上げ。

（30日・31日土・日休み）

4月1日～3日、標高基準点を貯水池南東隅の境コンクリート上、495mをきめる。

土壤1号、竪穴址1号測量。重機で遺構の多いとみる地域の上層の排土。濠東側の調査、ベルト断面調査。濠は北でテント裏で西にまがる。

4月4日～9日、方形周溝墓（運I号）を検出、調査、掘り上げ。周溝の内に2号住居址あり、遺物のみとり上げておく。重機、柿の木の切株をこぎ、表土排除－3号住－7号住居址を検出。（6日・7日土・日休み）9日午後テントを貯水池北側に移動する。

4月10日～12日、3号住調査、土器出土多く、掘り上げ測量。方形周溝墓（運）I号写真撮影、測量。重機排土作業。方形周溝墓（運）II号検出

（4月13日・14日土・日休み）

4月15日～19日、方形周溝墓（運）II号調査・掘り上げ、測量。4号住・5号住調査掘り上げ、測量。6号住調査出土器多く、出土状況図をあとにする。7号住・8号住検出調査。重機、環濠北側上層を掘りすすめる。

（4月20日・21日土・日休み）

（4月27日～29日連休、5月1日雨休み）

4月22日～30日、7号住・8号住掘り上げ、測量。6号住土器出土状況図。9号・10号・11号住居址検出調査、掘り上げ、測量。方周墓（運）I号の南溝より南にのびる方形周溝墓（運）III号を検出調査、掘

り上げ測量。

5月2日、12号住検出調査。水田に接する南に残る環濠調査、東側は荒れて不明。

(5月3日～6日連休)

5月7日～10日、12号住掘り上げ測量。13号住検出、調査掘り上げ測量。環濠北西端部調査終わる。写真撮影・全体測量。

(5月11日～12日土・日休み)

5月13日～15日、14号住・15号住検出掘り上げ、13・14号住居址測量。16号住検出調査水田跡の1部を重機で掘り、層序を調べる。

5月16日・17日、15号・16号住写真撮影・測量。西境道路北より40m入った西への農道にトレンチ調査。西75m入った地点に環濠の掘りこみを検出、写真撮影・測量する。これより南の農道を調査。西端部は畠となり調査不能。少し西に濠は入っているとみた。

17日前半テント撤収。午後貯水池南境近くを重機で掘り、環濠をはっきり検出、測量し現場の調査を西境道路の拡張工事までを残し終了する。

その後、遺物整理・復元・実測作業・図面、写真の整理を行う。

平成9年(1997)8月26日、西境道路拡張部の調査にいく。工事はだいぶ進んでおり、西境道路北より40m入った西の農道より少し南より黒土の落ちこみがみえ、重機をたのむがだめ、調査は明日にし、作業員を集めてもらうよう教委にたのむ。

8月27日、作業員が集まり、重機で耕土。方形周溝墓(運)IV号を検出全員で調査にかかる。表土は、20～30cmすでに削られており、西側は用地外となり、東側は従前の道路の境となり、周溝は幅と深さが減少しており、調査は注意を要した。主体部は東よりにあり、表土排除により浅い掘りこみとなっていた。測量し調査を終わる。

この最後の調査を終わり、報告書作成にかかる。

III 調 査 結 果

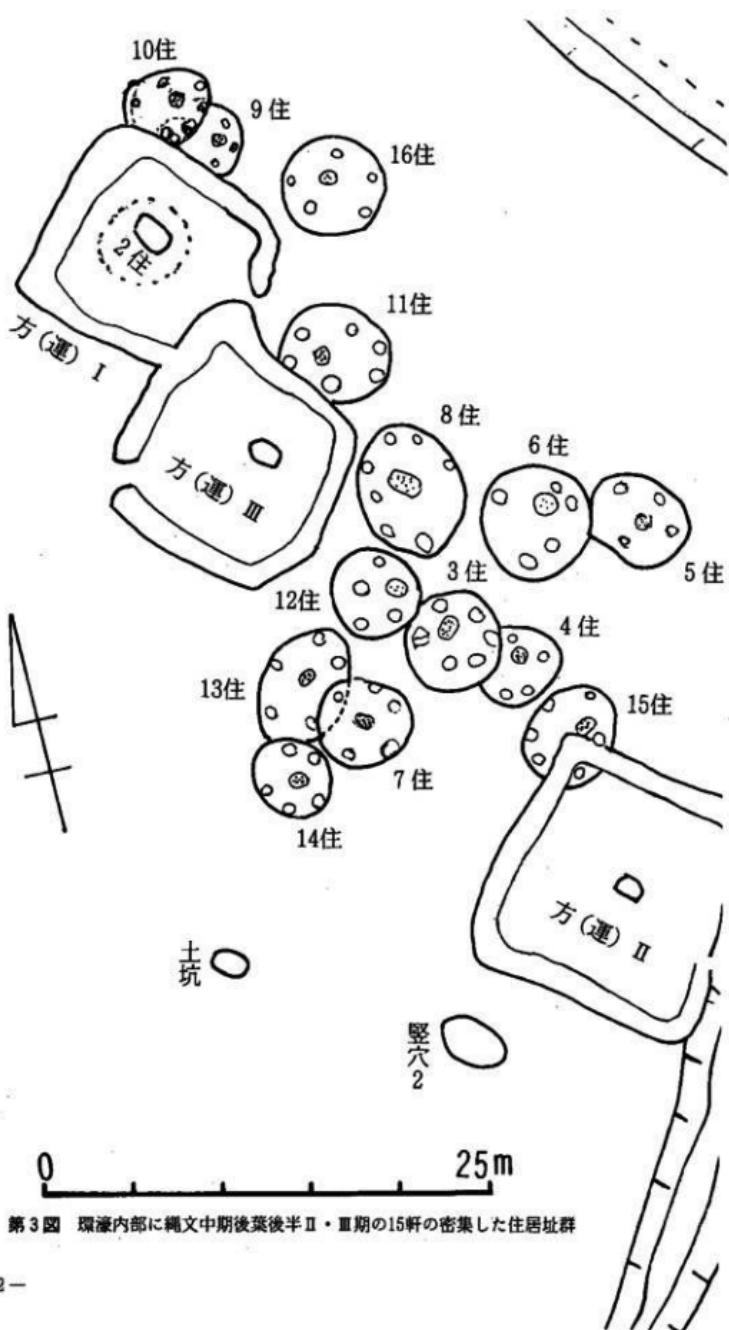
今次、帰牛原中原遺跡で発掘調査したのは、運動公園造成用地内の、中学校用地中央部から北に向かう道路を境に、東側は畠灌水工事立合調査で造構の発見はなく、また北側の東西方向の道路北側も造構の発見はなく、調査をこれら区域の調査をはぶき、西側境の道路を含めた全面と、南側水田の1部を加えた東西100m、南北約100mの範囲を全面発掘調査した。

今次発掘調査した造構は次のようにある。繩文中期後半住居址15軒。弥生後期末住居址1軒。方形周溝墓4基、土塙1基・竪穴2基。環濠－東側約2分の1があり、これに昭和45年度調査で検出した円形周溝墓II号がある。

繩文中期後半住居址は、東側は環濠に接する方形周溝墓(運)II号の北西端周溝より、北西45mの方形周溝墓(運)I号の北西端周溝まで東西方向に並び。北側環濠より南へ15mはなれて、これより10～25mの間に密集し、切りあいするものは多く、また周溝にかかるもの、周溝に囲まれ中にあるもの等がある。

弥生後期末住居址は水道貯水池南の水田址近くにあり、南側環濠の南壁まで掘りこんだとみられ、北側柱穴から北壁間は長すぎるものもある。

(帰牛原中原の調査は数回に及び、今回の造構番号は、帰牛原中原遺跡運動公園用地内1号住居址……



第3図 環濠内部に繩文中期後葉後半II・III期の15軒の密集した住居址群

というように付してあるが、記載上の便宜のため、運動公園用地内 1号住……とした。また、方形周溝墓については、環濠内発掘調査したのに対しては、方形（円形）周溝墓（運）1号……Ⅱ号とした。)

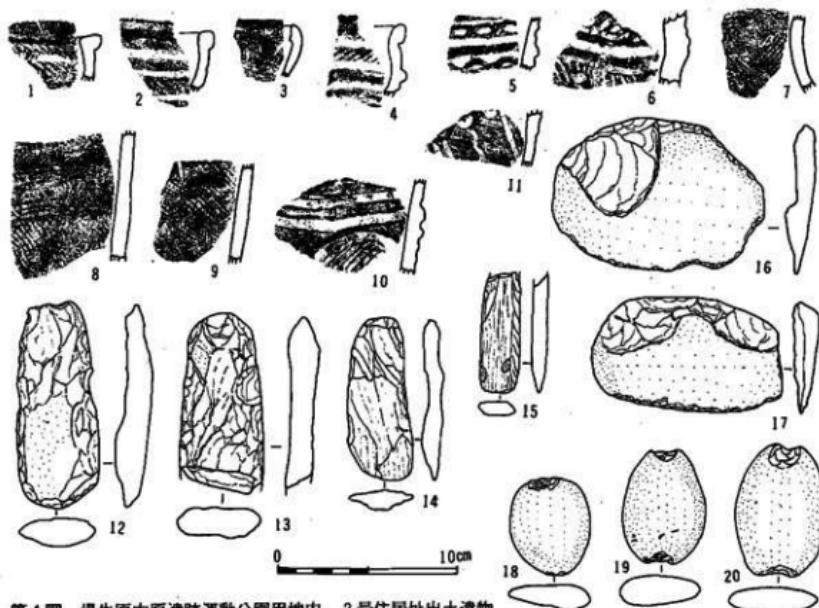
(1) 住居址

1. 繩文中期後葉住居址

(1) 運動公園用地内 2号住居址

方形周溝墓（運）1号の周溝内にあり、このため輪郭のみの調査とした。遺物（第4図）は小土器片のみで、繩文を横・斜に施した文様のみで、中期後葉Ⅲ期の土器とみる。

石器には打石斧・小形磨石斧・横刃形石器・石錐の出土をみる。



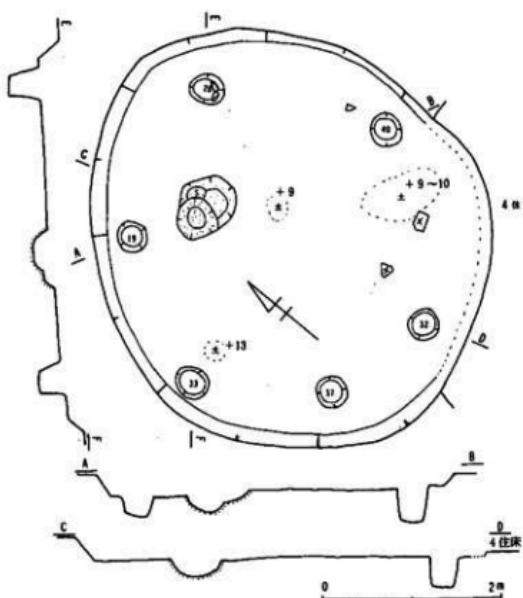
第4図 場牛原中原遺跡運動公園用地内 2号住居址出土遺物

(2) 運動公園用地内 3号住居址（第5図）

方形周溝墓（運）Ⅱ号北西周溝端より西5m、東側は4号住居址を切り、西は12号住と隣接している。南北4.95m・東西4mの楕円形の堅穴住居址で、壁高20~27cm、主柱穴6個、炉址は地床炉で中央より北に寄っており、二段の掘り込みで、浅いのは15cm、深いのは22cmの深さで焼土は著しい。

遺物（第5図）、破片のみで、床面上9~13cmよりの出土が多く、床面出土は少ない。土器には図6の1・7が中期後葉Ⅱ期とみられ、他は後葉Ⅲ期とみるが主となっている。

石器には刃部を欠く15の大形の磨石斧、小形の磨石斧に16・17があり、18・20・22の石錐がある。



第5図 堀牛原中原遺跡運動場造成用地内 3号住居址
形石器で14は小形である。13は石錘である。

(4) 運動公園用地内 5号住居址（第6図）

方形周溝基（運）II号の北10mにあり、西側の1部は6号住と接しあい、東環濠より西8mにある。南北4.1m・東西3.95m、やや不整形の円形の竪穴住居址である。炉址はほぼ中央部にあり、小形の炉址である。柱穴は壁から少しはなれて4個があり、柱穴の深いのは52cm、浅いのが27cmで他は30cm余の深さをもつ。

遺物（第9図15～26）、土器は15～21の小形で出土量は少ない。15～17・19の溝文に斜線を引く文様が目に付く。中期後葉II期からIII期への移行期の土器とみたい。

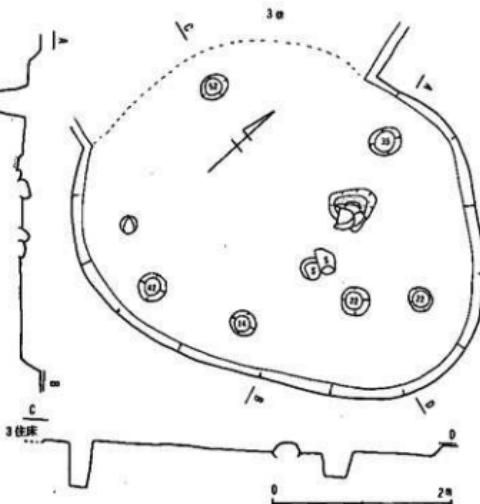
石器、23～25の打石斧（23は刃部欠け）、26の石錘の1個の出土をみたにすぎない。

(3) 運動公園用地内 4号住居址（第7図）

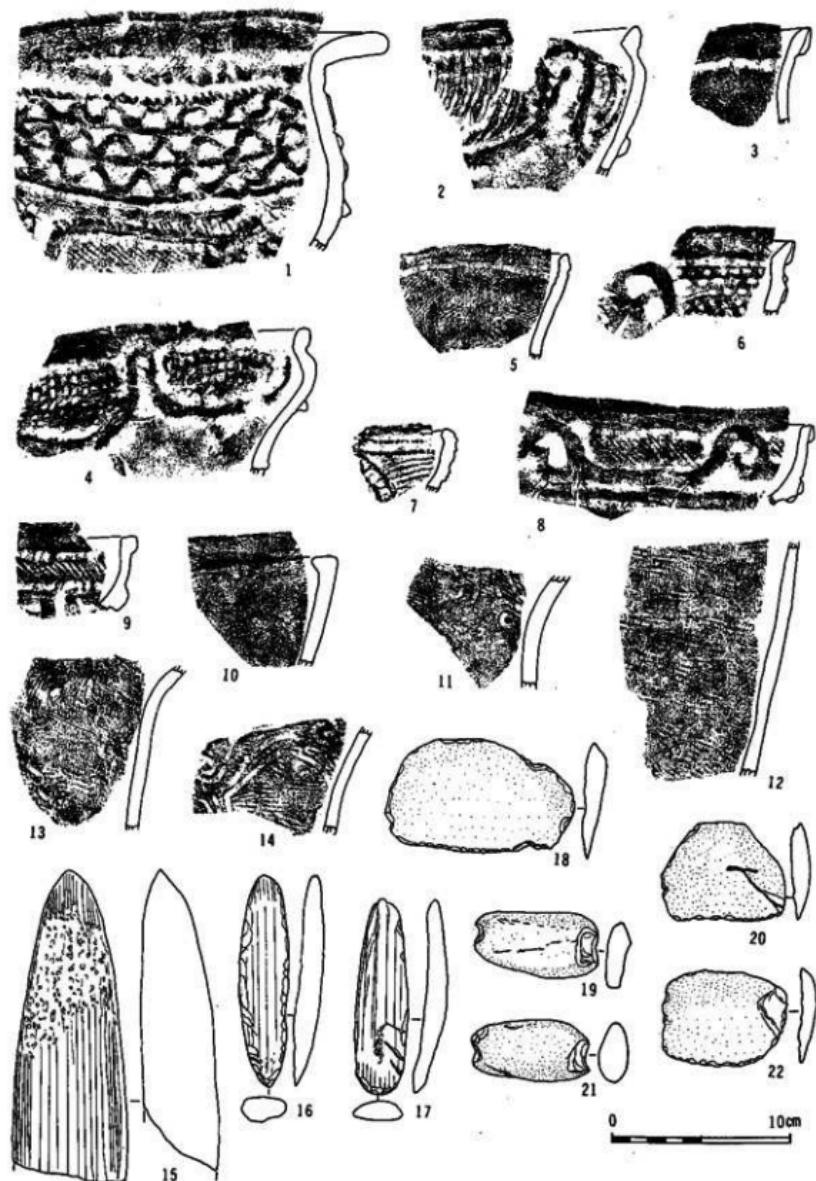
方形周溝基（運）II号の周溝北西端より2m西にあり、西側の1部は3号住によって切られ、東側は15号住と接しあっている。南北3.55m×4.5mの椭円形をなし、柱穴は6個みられるが配置からみると主柱穴は4個とみる。土層は柿の木の抜根のため竪穴の掘りこみは10～12cmであり、柱穴は32～52cmと深いのである。炉址は中心から北東に片寄っており、南東側2分の1近くは石塀をなしている。

遺物（第9図1～14）、土器の出土は少ないのである。中期後葉III期とみるが主となる。土偶の手の部分7の出土がある。右手とみられ2本の条線が表裏に付せられている。

石器（第9図8～14）、8・9は打石斧、10は磨石斧の刃部を欠く。11は打石斧の刃部を欠く、12は大形の横刃



第7図 堀牛原中原遺跡運動場造成用地調査 4号住居址



第6図 報牛原中原遺跡運動公園用地内 3号住居址出土遺物

(5) 運動公園用地内 6号住居址 (第9図)

5号住居址の南西の一部分と接しあっている。西側に8号住・3号住居址が2mの距離をおいて並ぶ。

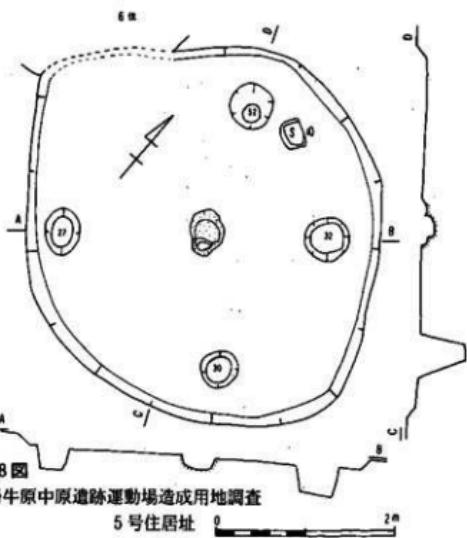
南北5.5m、東西5m、南北断面測定地点では南北4.7mと東南側が広く、炉址のある東西は4.2mと短くなり、住居址の形は変形の矩形をなしている。

柱穴は壁に沿って6個が並ぶ。炉址は中心より北東に片寄ってあり、東西1.2m、南北1.1m、深さ2.5mと大形で灰がつまっていた。

遺物(第11・12・13図)は多く、5

号住に接する近くより層をなして出土をみ、上層の土器は1時期新しともみるものであり、地主が柿の木の植替の

時にここに埋めたともみる状態であった。第12図の土器の多くはここよりの出土である。

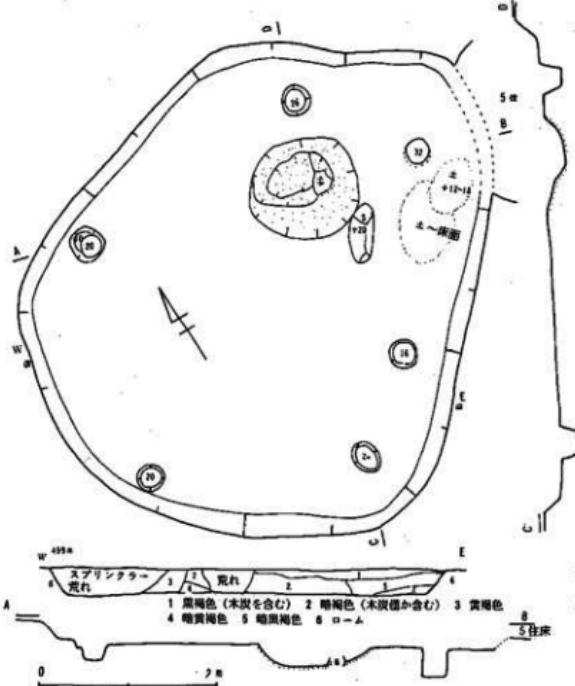


第8図

帰牛原中原遺跡運動場造成用地調査

5号住居址

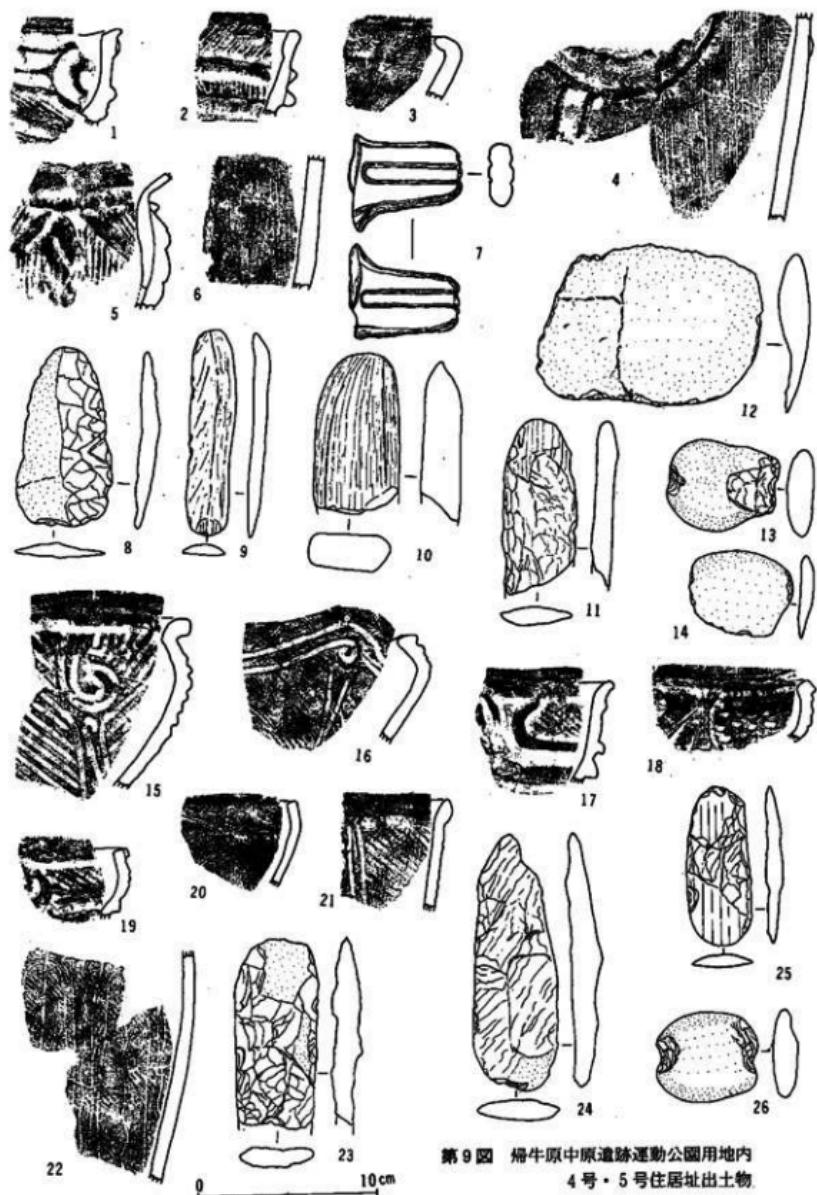
2m



第10図 帰牛原中原遺跡

運動場造成用地内

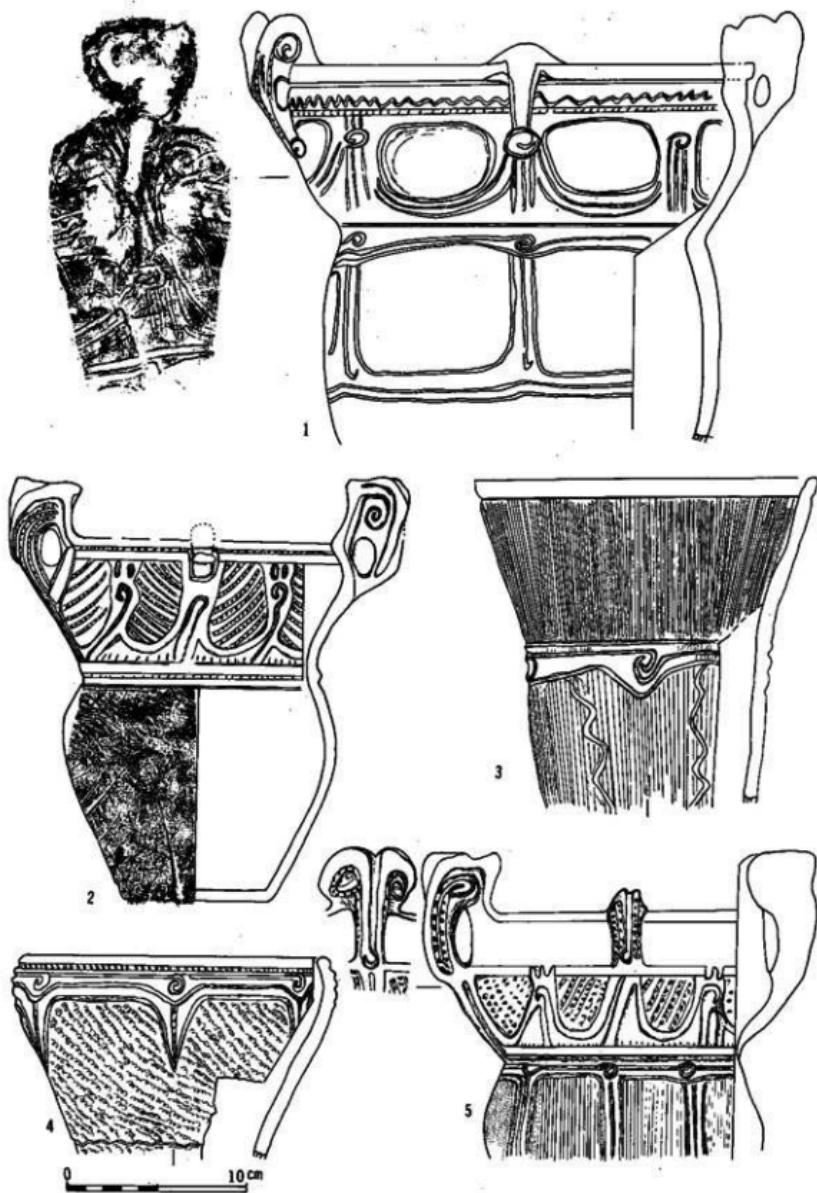
6号住居址



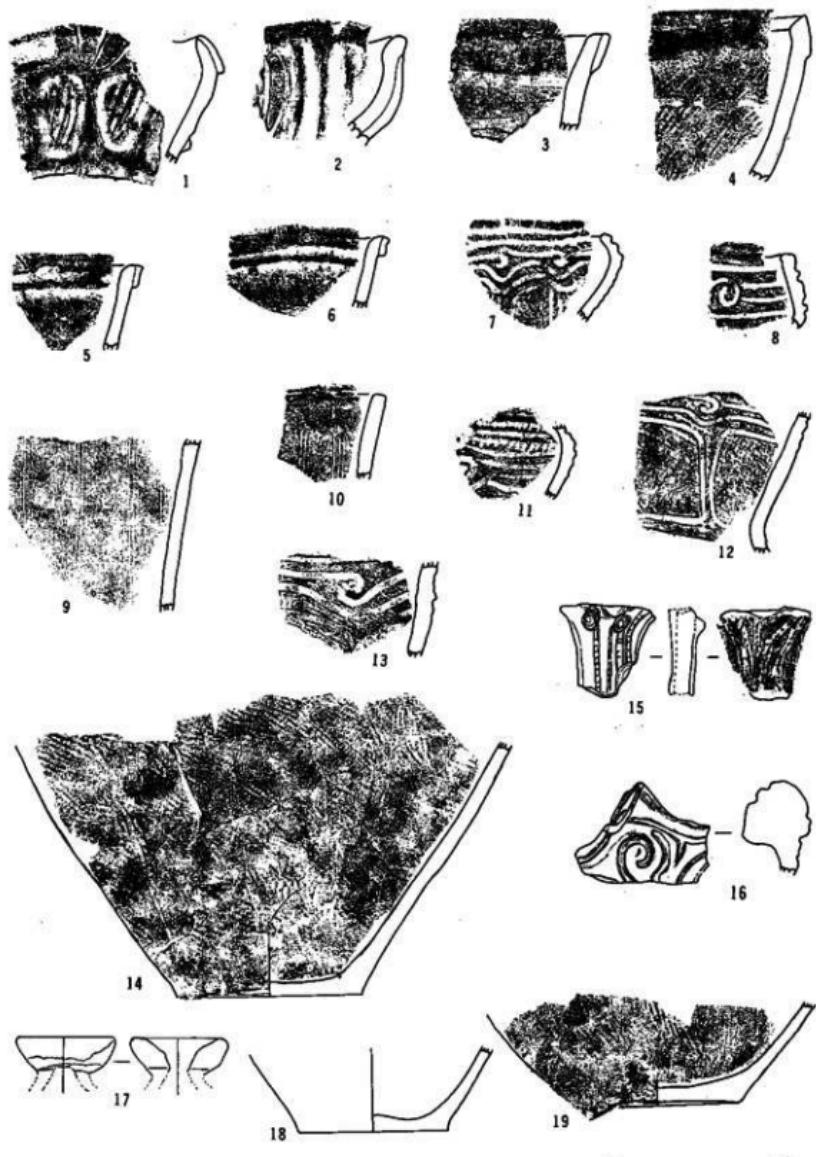
第9図 堀牛原中原遺跡運動公園用地内

4号・5号住居址出土物

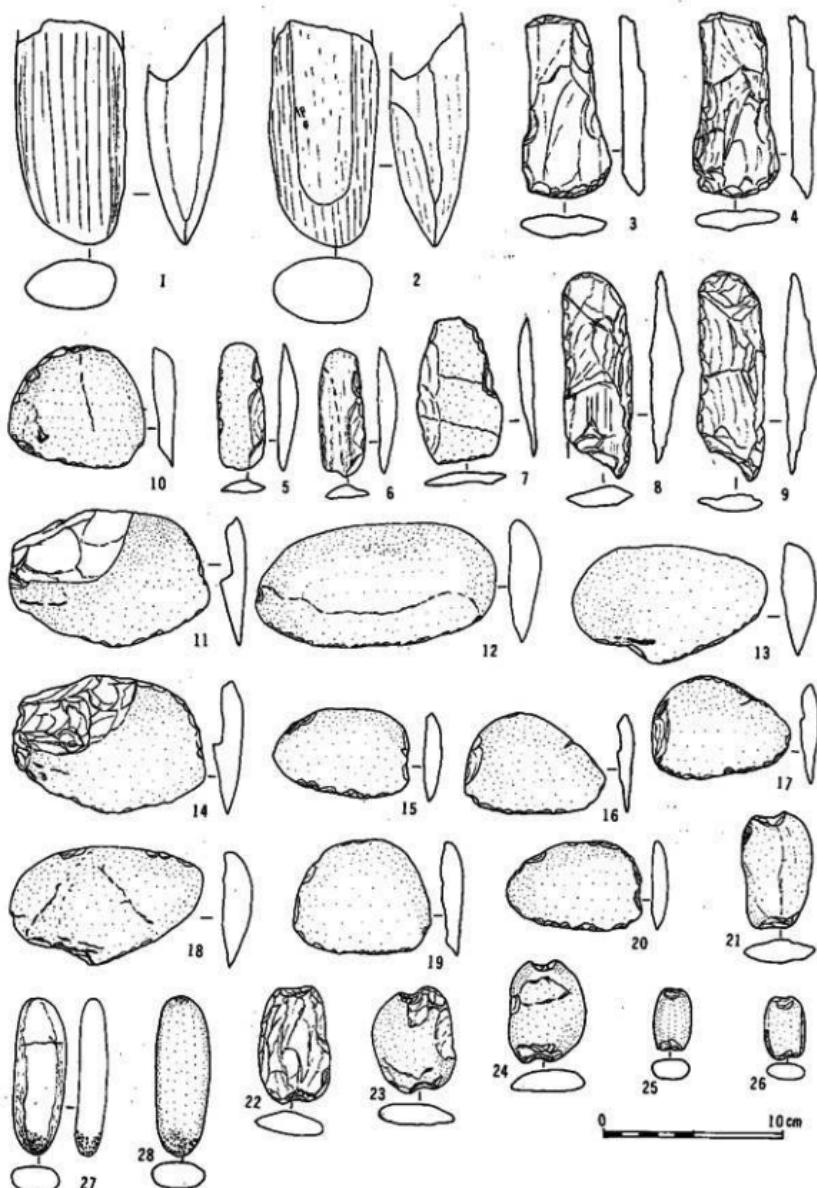
(1~14…4号住居址, 15~26…5号住居址出土)



第11図 塚牛原中原遺跡運動公園建設用地内 6号居址出土遺物（I）



第12図 堀牛原中原遺跡運動公園建設用地内 6号住居址出土遺物(II) (上層出土が多い)



第13図 烏牛原中原遺跡運動公園建設用地内 6号住居址出土遺物（Ⅲ）。

床面出土の（第11図）の土器は、（3は覆土出土）キャリバー形の深鉢・鉢であり、1・2・5は把手もち、中期後葉II期の古い形体を残すものとみられる。

覆土出土の土器（第12図）には、中期後葉II期の口縁部が内側に湾曲する7・11があり、また床面出土の15の土偶胸部・16の把手の折れ、17の小形土器の口縁部は中期後葉II期とみるが、他はIII期の5号住居址の入りこみとみられる。

石器（第13図）の出土は多く、磨製石斧に1・2の大形があり、基部を欠く。打製石斧に大形は3・4・8・9があり、8・9は刃部を欠く。小形打石斧に5～7がある。

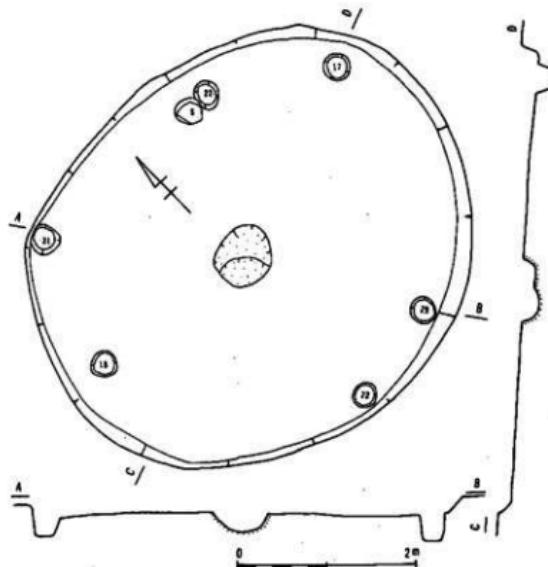
横刃形石器には大形の11～14・18があり、小形の10・15～17・19・20がある。石錐には中形の21～24、小形に25・26があり、敲打器に27・28がある。

(6) 運動公園用地内 7号住居址（第14図）

方形周溝墓（運）II号西8mにあり、西側は13号住居址の1部上にのっている。南北4.5m、東西5.2mの梢円形をなし、壁高20cm、柱穴は壁に沿って6個で、2個ずつが対になるような配置をしている。炉址は地床炉で住居の中心より僅か北東によってあり、南東側は深さ20cm、北西側は15cmと二段の掘りこみになっている。

遺物（第15図）、土器の出土は少なく、中期後葉III期である。器形・文様のはっきりしたものはない。

石器には、11～14の打石斧があり、13は刃部を欠く。15の磨製石斧は小形で刃部を欠く。横刃形石器に16～21があり、21は小形である。石錐に22がある。



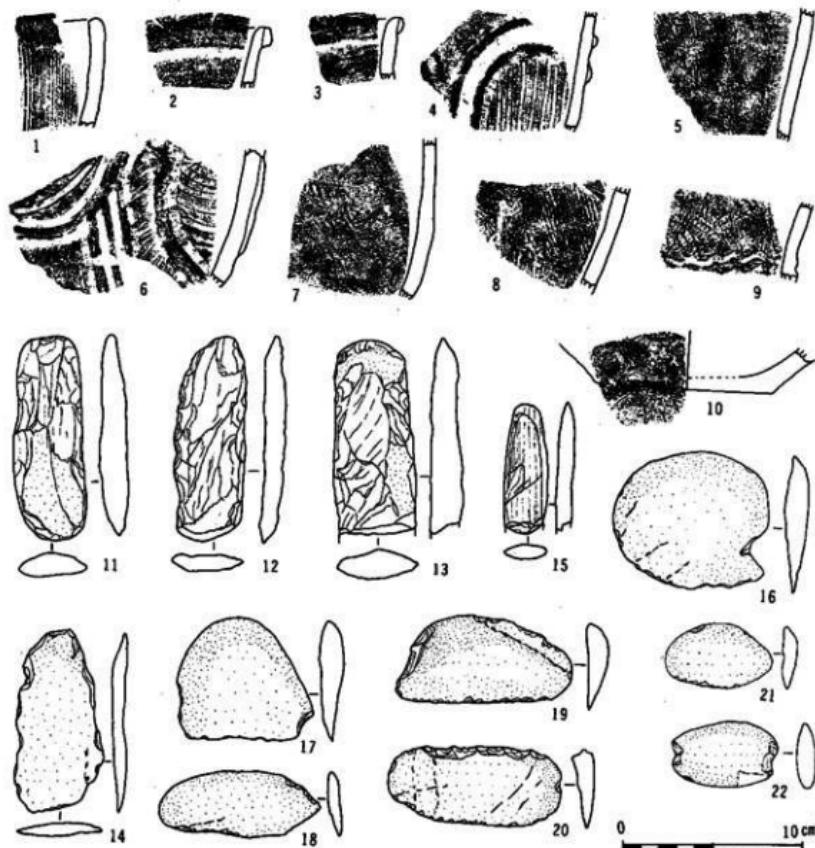
第14図 燐牛原中原遺跡運動場造成用地内 7号住居址

(7) 運動公園用地内 8号住居址 (第16図)

方形周溝墓(通)Ⅲ号の東1m、南に12号住に接している。南北6.3m、東西5.1mの楕円形をなす竪穴住居址である。柱穴は壁に沿って8個がある。炉址は中央より北東に寄ってあり石圓炉で、南側は石がはずされている。南北1.25cm、東西1.05cm、深さ40cmと大型であり、焼土は著しい。

遺物(17・18図)、土器の床面出土は少なく、中層よりの出土が多く、石器は床面出土が多い。土器は大型の深鉢が多く、口縁部が内側に湾曲し、キャリバー形の深鉢と、17図4・5の把手状にみられる口縁の文様が目につく。中期後葉Ⅱ期の土器を主にしているとみる。

第18図1は新しい系統とみるが、他の胴部・底部については、はっきりしないが、Ⅱ・Ⅲ期のものがまじっているとみる。



第15図 帰牛原中原遺跡運動公園用地内 7号住居址出土遺物

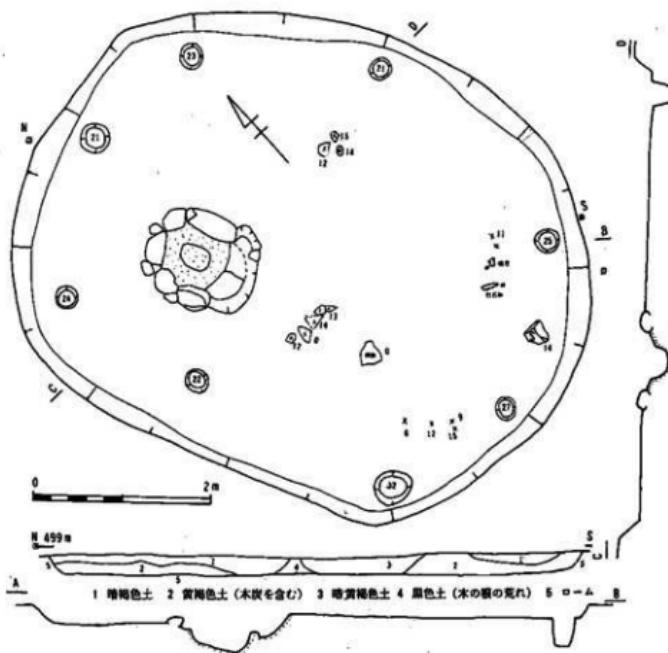
石器（第18図9～16），石器の出土は少なく床面出土である。9は半磨製の石斧，10は小形の打石斧，横刃形石器に11～14があり，14は小形である。石錐に15・16がある。

(8) 運動公園用地内 9号住居址（第19図）

方形周溝墓（運）1号の北東側周溝に南側の1部は切られ，北西は10号住居址の3分の1を切っている。径約4mの円形の堅穴住居址であり，炉址は地床炉で，東壁より50cm入ったところから西へ70cmの径をなし，20cmの掘りこみで焼土は著しい。柱穴は壁に沿って4個があり，方形周溝墓の溝の中に1個あったともみられ，また，炉址より北1m，東壁から1mの位置に柱穴1個がある。

遺物（第20図）。土器の出土は少なく，大形土器の1は，口縁部を横へはしる渦巻文と弧線文の組合せの文様がみられ，5は壺形土器で口縁部が僅かにたれ，胴中部が少しうくらみ，文様は繩文のみである。繩文中期後葉Ⅲ期の土器であり。6・8・9もこの系統の土器とみる。2～4・7は口縁部が内側に向曲し，中期後葉Ⅱ期の土器であり，切りあいの10号住居址の土器のまざったものとみられる。

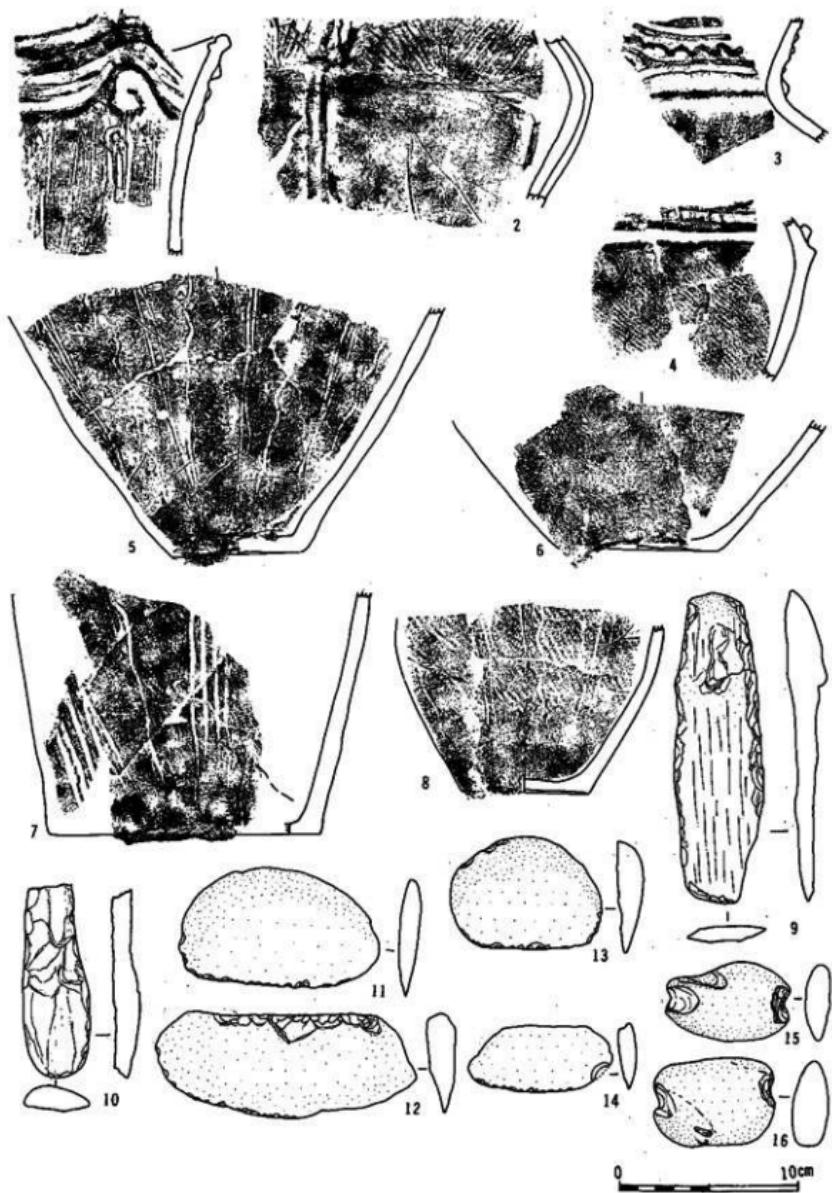
石器は少なく，10～12の打石斧，13の磨石，14・16の横刃形石器・15の石錐があるのみである。



第16図 帰牛原中原遺跡運動場造成用地内 8号住居址（1：20）



第17図 烏牛原中原遺跡運動公園建設用地内 8号住居址出土遺物(1)



第18図 場牛原中原遺跡運動公園建設用地内 8号住居址出土遺物（II）

(9) 運動公園用地内10号住居址（第19図）

方形周溝墓（運）1号の北東側周溝に住居址の南端を僅か残して、南側の1部は切られ、東3分の1余は9号住居址に切られ、3分の2を残している。東西4m、南北4.5mの不規則な梢円形をなす竪穴住居址で、柿の木をこいだ跡の土を削りとったため、表土は浅くなっていた。主柱穴は壁に沿って4個がみられているが、周溝に1個または2個が掘られているとみられる。

炉址は北側に寄ってあり、石囲炉あったが、石を抜かれたあとが残っている。

遺物（第21図）、土器1～4は周溝からの出土で、1～3は同一個体で、1の大きく突出した把手から屈曲して口縁から下に粘土紐で四段に曲線をもって2の小突起の口縁からのはじまる粘土紐の四段の曲線と結ばれている。

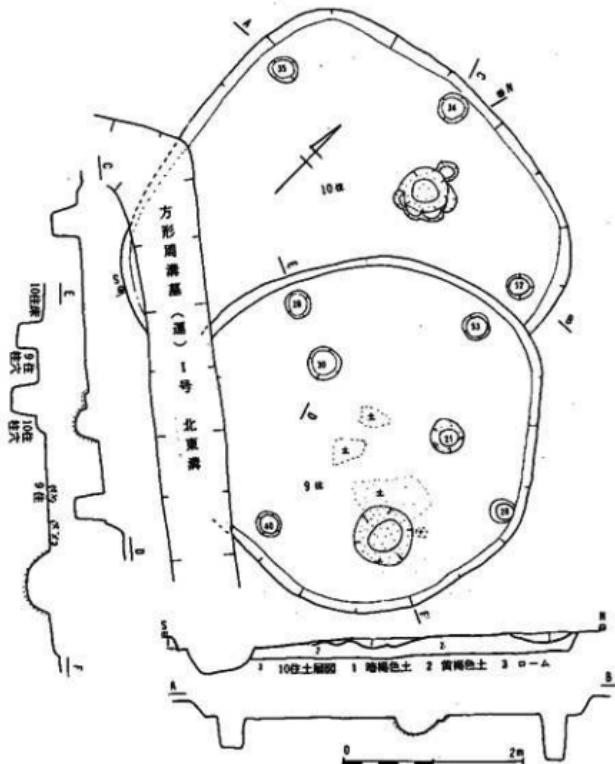
2の2個の小突起は5cm

の間隔で開き約6cmで三
角形に結ばれ弧線が下が
る。

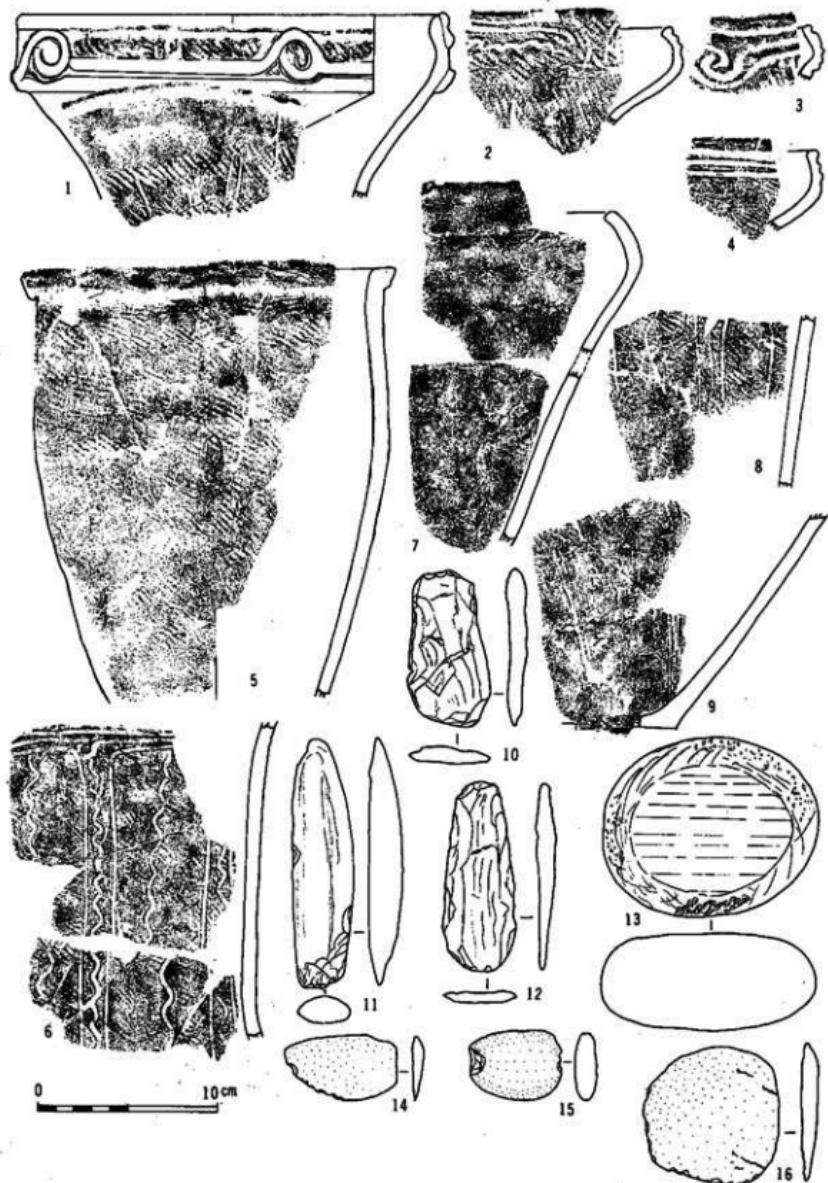
4はキャリバー形の大
形の深鉢で、口縁部は10
cm間隔に太い2行の粘土
紐による小突起をなし、
これが胴頸部まで下がり、
この隆線間は櫛状具によ
る荒い縞の沈線で埋めら
れている。胴部は繩文に
8cm間隔に2条の曲線が
施されている。

5～9は小片であり、
文様ははっきりしないが、
内湾する口縁をなし、7
は口縁部に小突起をもっ
ている。土器は繩文中期
後葉II期とみる。

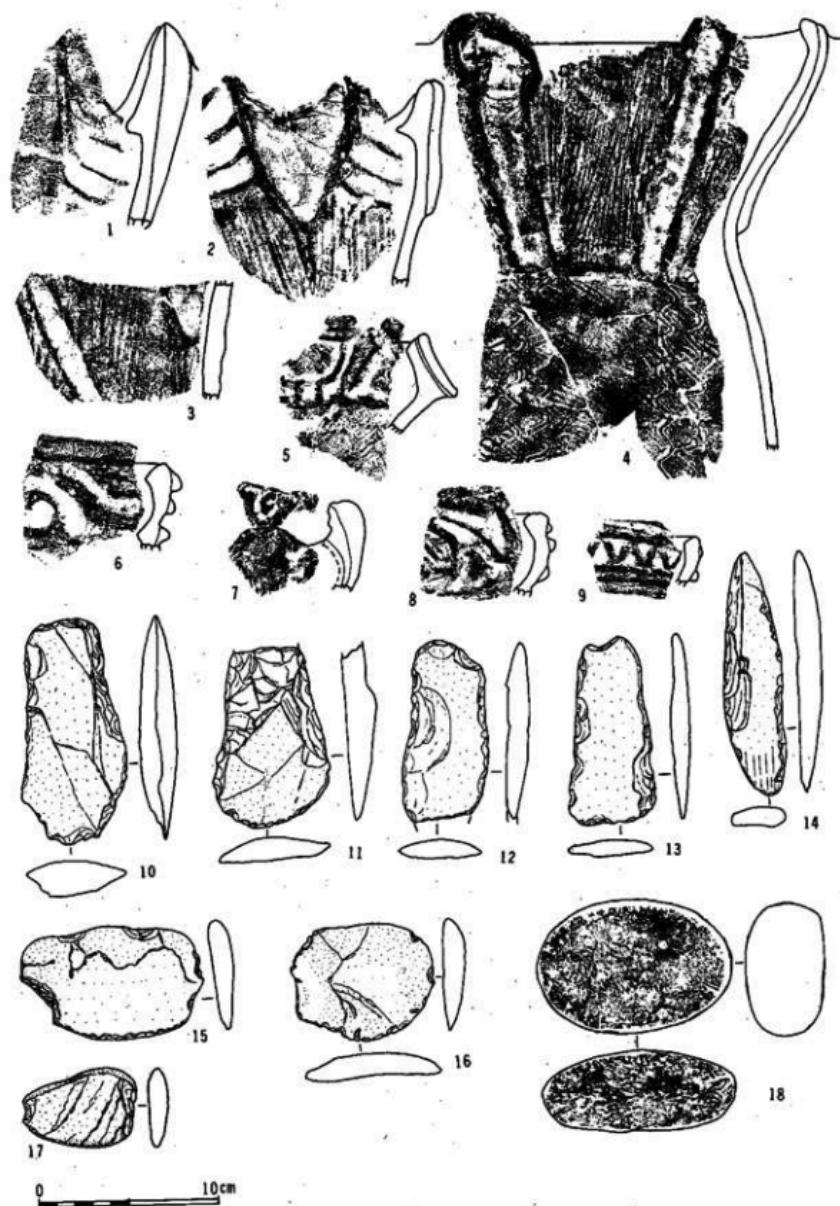
石器、打石斧に10～14
があり、横刃形石器に15・
16が、石鏟に17がある。
18は磨石でよく磨かれて
いる。



第19図 堀牛原中原遺跡運動場造成用地 9・10号住居址



第20図 犀牛原中原遺跡運動公園建設用地内 9号住居址出土遺物



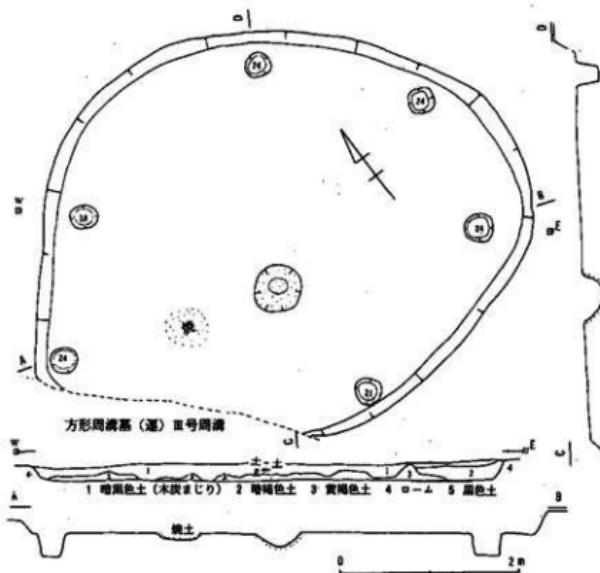
第21図 犀牛原中原遺跡運動公園建設用地内 10号住居址出土遺物

10 運動公園用地内11号住居址（第22図）

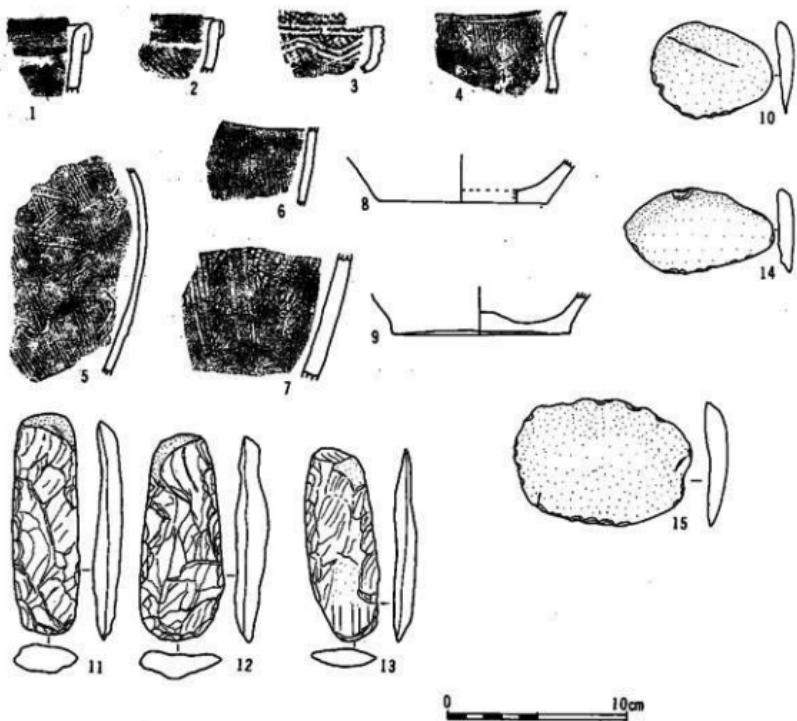
方形周溝墓（道）Ⅲ号の東側周溝の中央よりやや南寄りに1部かかってあり、南北4.6m・東西5.8mの楕円形をなし、柿の木の抜根で表土は削りとられ、深さ15cm～20cmの竪穴住居址である。土層は、1層は暗黒色土（木炭まじり）、2層は暗褐色土、3層は黄褐色土、4層はロームとなり、5層は西側の壁近くに柱穴を含め薄い黒土層が65cmあったが何であるか不明であった（断面図参照）。柱穴は壁沿いに6個あるが、周溝で1個切れたものがあったが不明。炉址は中心よりやや南東にあり、地床炉である。

遺物（第23図）は少なく、土器は小片のみで、大半は縄文中期後葉Ⅲ期の土器で、文様は櫛状具による縦の線を下げるものと、縄文に弧線を引くもので、3の小片のみ、口縁部は湾曲し、口縁に文様を施して、1時期古いとみる。

石器には、打石斧に11～13があり、横刃形石器に10・14・15・16がある。



第22図 勝牛原中原遺跡運動公園造成用地内 11号住居址（1：20）



第23図 帰牛原中原遺跡運動公園建設用地内 11号住居址出土遺物

(1) 運動公園用地内12号住居址（第24図）

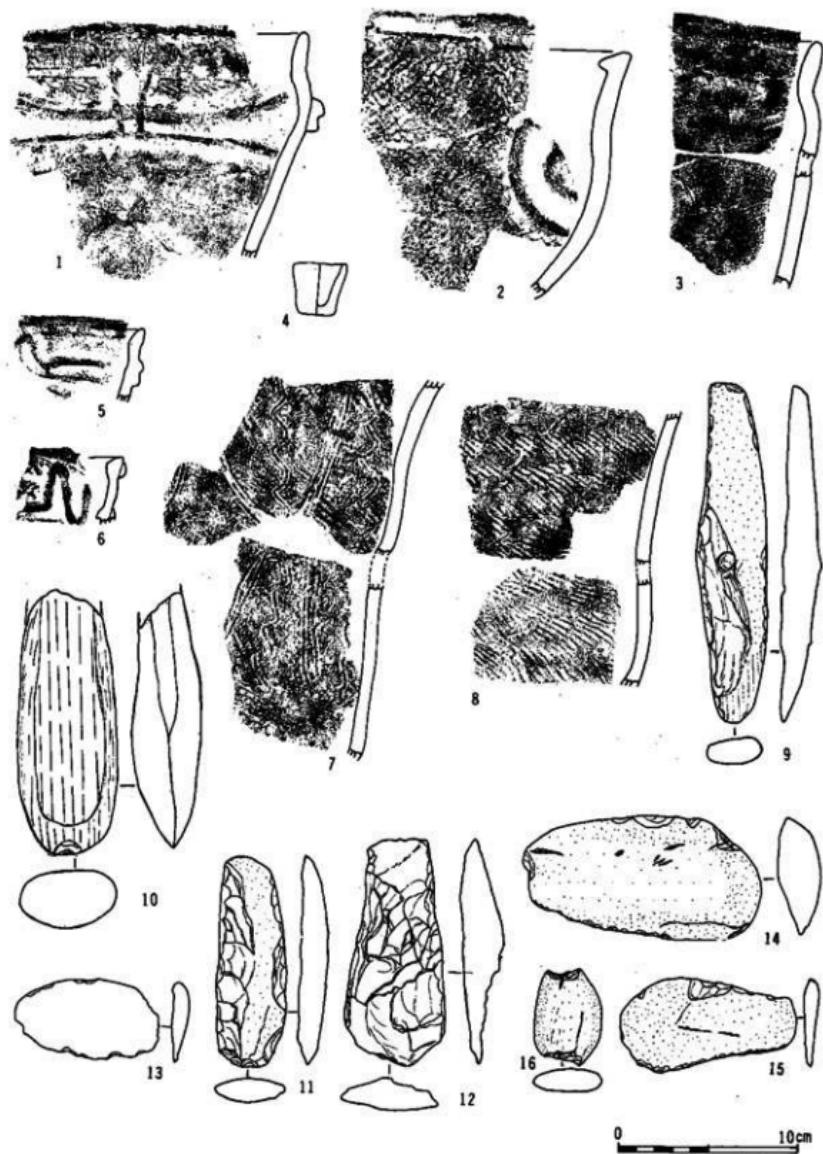
住居址は、南に3号住・西に13号住・東に8号住と接しあい、北1.7mに方形周溝墓（運）Ⅲ号の南周溝がある。南北4.05m、東西4.7mの不整形の橢円形をなし、柱穴は壁に沿って5個あり、炉址は中央より東に寄っており、東側半分に炉石をめぐらせており、深さ20~25cmの掘りこみをなし、焼土は著しい。

遺物（第25図）。土器の出土は少なく、中期後葉Ⅲ期が主であり、口縁部の内にむかって滴曲するものではなく、文様の主となるは繩文に、横状具による数条の直線または弧線を下したるもののがみられる。4は小形の手作り土器である。

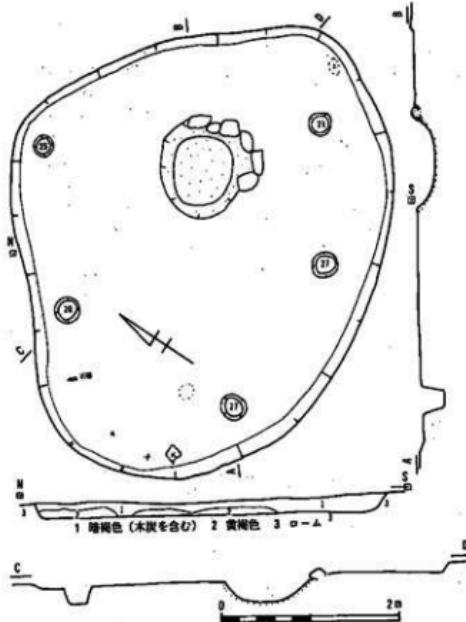
石器には、9・10の磨製石斧、11・12の打石斧、13~15の横刃形石器と16の石鍬がある。

(2) 運動公園用地内13号住居址（第26図）

方形周溝墓（運）Ⅲ号の南周溝の南3mにあり、東は12号住に接し、南東側の1部は7号住に、北東側の1部は14号住に切られているが、各住居址とも切り方が中層までで、住居址は完全に近く残されていた。南北5.4m、東西4.85mのややゆがみをなす円形の堅穴住居址である。柿の木を掘りとったため表土は削られ浅くなっている。土層は表土が削られたため上層



第25図 烏牛原中原遺跡運動公園建設用地内 12号住居址出土遺物



第24図 場牛原中原遺跡運動公園用地内 12号住居址

址に接している。南北4.3m、東西3.6mの梢円形をなし、土層は上層は柿の木をこぎ、表土は削りとられ浅くなっていた。土層図でみると①は暗黒色土で僅かに部分的に残るのみで、②の黄褐色土が大半を占め、③の黒色土は（灌水管の掘りこみの荒れ）、④ロームとなる。

柱穴は壁に接して5個みられ、炉址は、中心から東によってあり、小型の地床炉である。

遺物（第30図1～10）は少なく、土器は1～4の小片のみで縄文中期後葉Ⅲ期とみる。

石器（第30図5～10），

から床面までの変化はなく、場所によって①黄褐色土、②黒色土（耕作の荒れとみる）、③ロームとなる。

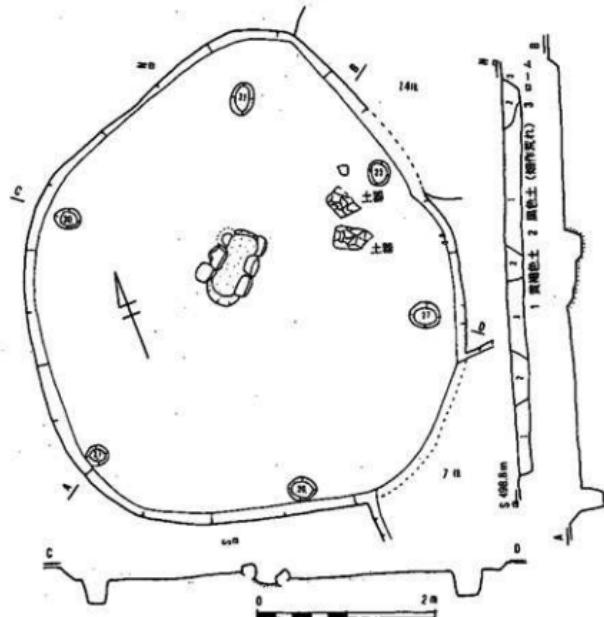
柱穴は壁に沿って6個、炉址は中央より僅か西により、石圓炉である。南西側と北東側は石ではなく、この間の長さ90cm、石組をもつ両端の幅50cm余である。

遺物（第27図）は少なく、土器1～4は本址の土器とみる。1・2は大型の深鉢、3・4は浅鉢で、3は器全面に乳状の突起が付られ、中央に把手をもつ。時期的にはっきりしないが中期後葉Ⅲ期からⅣ期への移り変わりの時期とみたいたいが不明。5～8の土器は14号住の土器とみられ、後葉Ⅲ期の土器である。

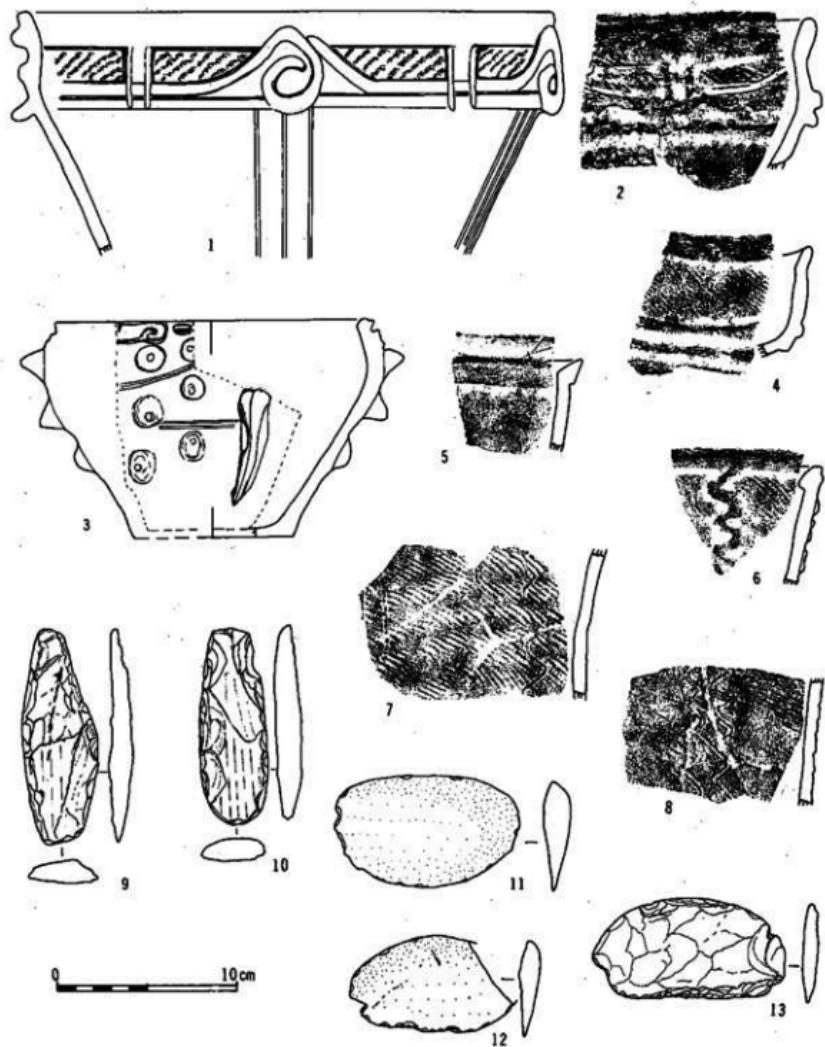
石器には、9・10の打石斧・11～13の横刃形石器であり、量的に少ない。

(3) 運動公園用地内14号住居址（第28図）

13号住居址の南に接し、東は7号住居

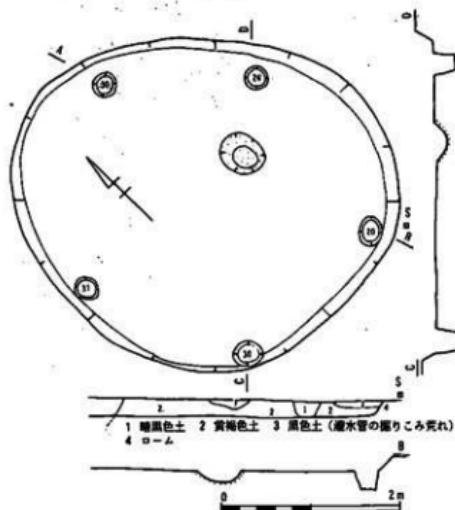


第26図 場牛原中原遺跡運動場造成用地内 13号住居址



第27図 烏牛原中原遺跡運動公園建設用地内 13号住居址出土遺物

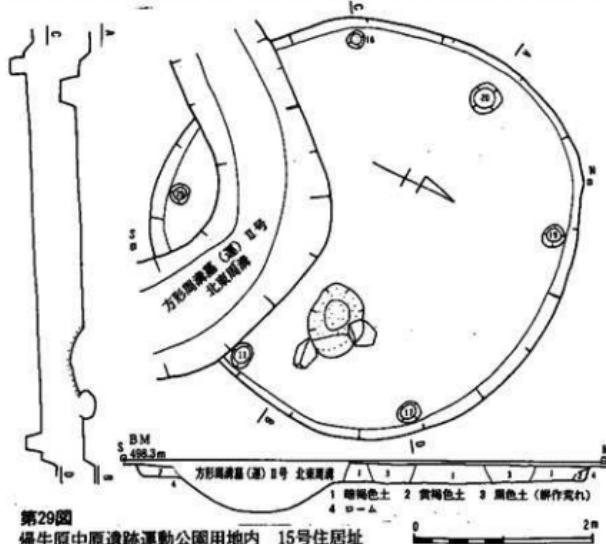
打石斧に5~8があり、横刃形石器9・10の2個のみである。



第28図 堀牛原中原遺跡運動公園用地内 14号住居址

な深鉢で口縁部は平緩で口縁部が内側に湾曲し、キャリバー状をなし、頸部の強いしまりに、中央部と両端に耳状の小把手が付く。文様は櫛状具による条線が口縁部から肩部下部に縦に施されている。

12・13は平縁の
口縁部が内側に
湾曲しており、
縄文中期後葉II
期の土器とみる。
石器には18・
19の大形、20・
21の小形の打石
斧があり、横刃
形石器に22~24
がある。



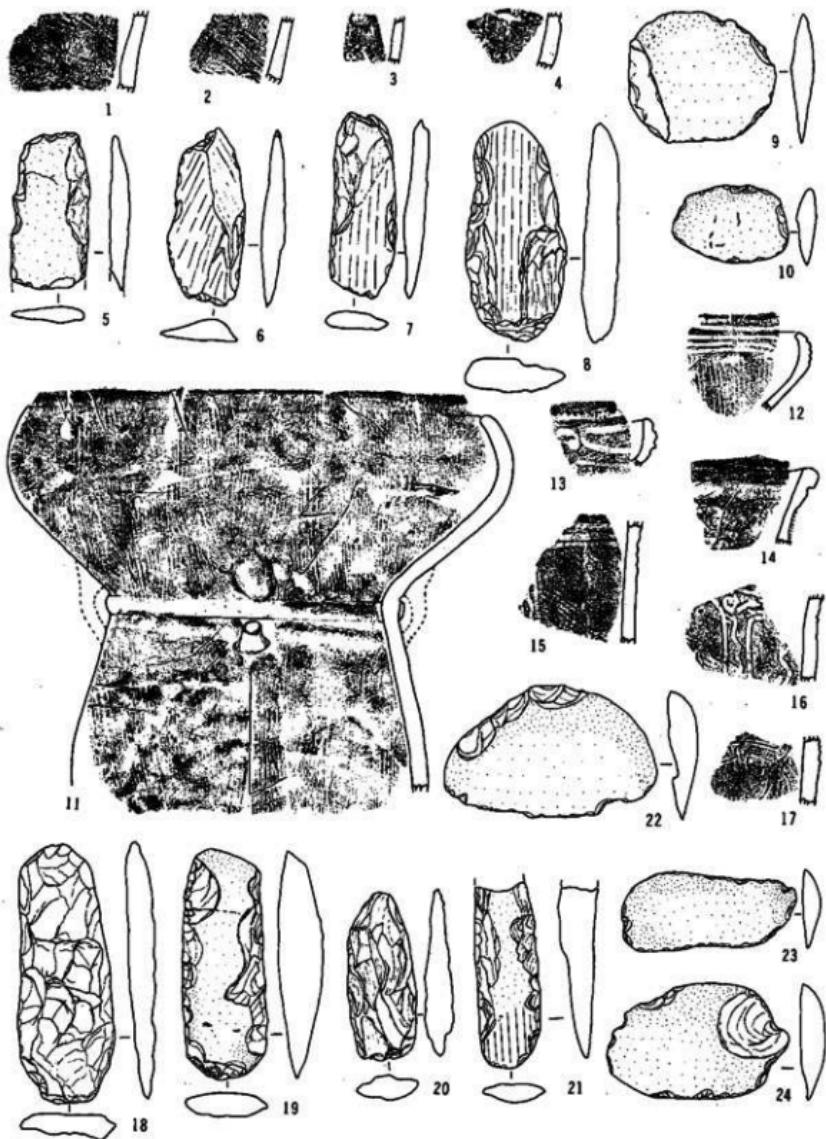
第29図 堀牛原中原遺跡運動公園用地内 15号住居址

04 運動公園用地内15号住居址（第29図）

南側は方形周溝墓（道）II号の北東側のカーブとなる周溝に切られ、南側に1部を残している。北は4号住に接する。東西4.65m・南北4.75m（南側は周溝で切られているが）で円形をなしている。土層は上部は抜木のため表土は削られ浅くなっているが、20cm前後の深さを残しており、1層は暗褐色土、2層は両端に僅か残す黄褐色土、3層は黒色土（耕作の荒れ）で、ロームとなる。

柱穴は壁に沿って6個が並ぶ。炉址は、中心より離れて東壁から70cmより西に向かってあり、東西70cm×南北60cmの楕円形をなす地床炉であるが、東と北に人頭大の石2個が置かれている。

遺物（第30図11~17…土器、18~24…石器）、土器の出土は少ない。11は大き



第30図

磐牛原中原遺跡運動公園建設用地内 14号・15号住居址出土遺物

(1~10…14号住居址, 11~24…15号住居址)

(1) 運動公園用地内16号住居址（第31図）

方形周溝墓（運）I号の南東カーブより1.5m東にあり、北側環濠より西約10mにあり、環濠調査時に環濠の土を住居址の位置に盛り上げ、この土を運んだ際に住居址の存在を見出したが、覆土は削り、壁は不明となるが、住居址の輪郭はわかり調査する。南北5.2m×東西4.9mの円形をなす竪穴住居址であった。柱穴は壁に沿って5個が検出された。炉址は中心より僅か南西に寄っており、石囲炉で東側中央の石1個ははずされていた。北側は焚口で石は無かったとみる。

遺物は、土を削りとった所には残っておらず、土器・石器のみ

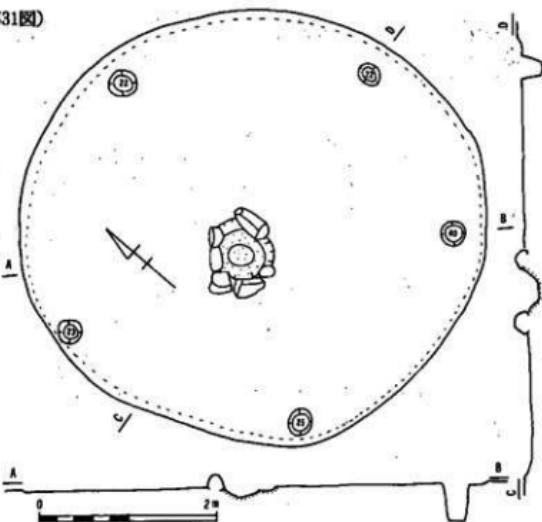
1点も発見できなかったが、住居址の形態からみて、縄文中期後葉II期とみる。

2. 弥生時代住居址

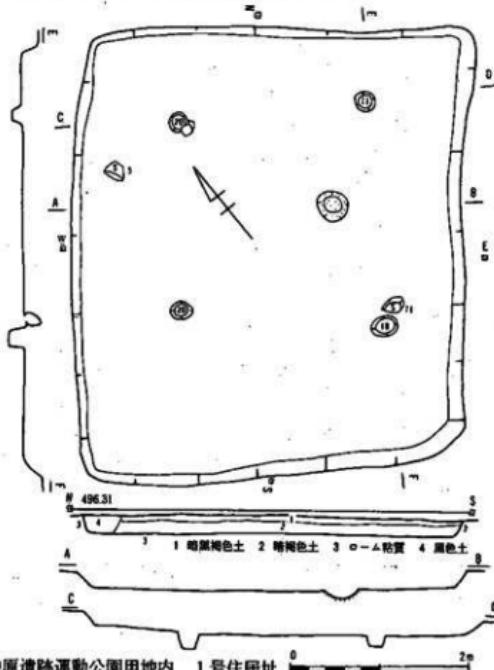
(1) 運動公園用地内1号住居址

（第32図）

水道貯水池の南西端を僅か離れた位置にあり、西側環濠の西側にあり。調査は環濠の発見前に行なったため、南東側は環濠の南端まで掘りこんでいる。このため南北の最長は西側で5m、最短の東側で4.7mとなっており、東西は4.4mの隅丸長方形をなし、柱穴は北東側壁から2個、壁から90cmと70cmの間隔があり、南西側2個は南西壁から1.8mと1.4mの前者の2倍の間隔をもっている。環濠の位置は大きな柿の木を掘りこぎ、用地外の畠へ移すため、木の掘りとりのすむまでは不明であり、濠



第31図 堀牛原中原遺跡運動公園用地内 16号住居址
(環濠調査時に覆土を削り壁は不明)



第32図 堀牛原中原遺跡運動公園用地内 1号住居址

も水田地帯に近く、傾斜も強く、中層までは崩されていた。このため南西側は壁が黒土となっていたため、土層の堅さまで掘り進めたとみられる。

炉址は、南西側の2柱穴間より、内側へ30cm入った位置にあり、地床炉である。遺物は第35図1の半磨製石斧の出土のみで、時期ははっきりしないが、炉址の2個の柱穴間中心より内側に入っているのからみると弥生後期前半から中期後半ともみられる。

3. 壁穴址・土壤（第33図1・2、第34図）・遺構外

(1) 壁穴址1号（第33図1）

方形周溝墓（道）II号の南西3mにあり、東西3m×南北2.3m、深さ50cm～55cmのややいびつの梢円形をなしている。遺物（第35図2・3）には、2の小形打石斧片（刃部欠け）と3の小形土器片があり、縄文を横位の2条の沈線が施されており、縄文中期後葉後半ともみられるものである。

(2) 壁穴址2号（第33図2）

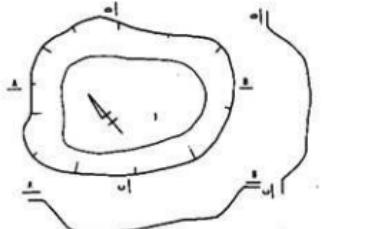
運動場入口の主幹道路より東11m、北側環濠より南12往にあり、長さ東西3.1m、南北は東側で1.5m、西側で0.6m幅の変形の梢円形状とみる形態をなし、深さは50～70cmの掘りこみをなしている。出土遺物なし。

(3) 土壤1号（第34図）

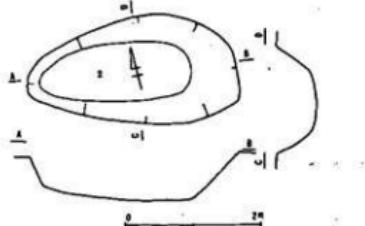
壁穴址1号の西11m、14号住居址の南7.5mにあり、東西1.9m×南北1mの梢円形をなし、深さ20cm。遺物（第35図4）は小形土器片1点の出土で、文様ははっきりしないが縄文中期後葉後半の土器ともみる。

(4) 遺構外の遺物（第35図5）

水田取入口水道跡よりの出土で、浅鉢の底部で、糸切底で高台がつき、軸が施されており、近世初頭のものと思われる。

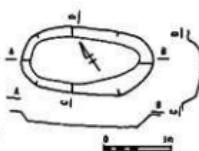


(1) 壁穴址1号

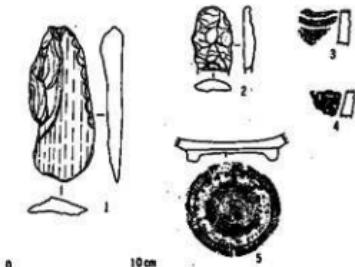


(2) 壁穴址2号

第33図 烏牛原中原遺跡運動公園用地内



第34図 烏牛原中原遺跡運動公園用地内 土壤1号



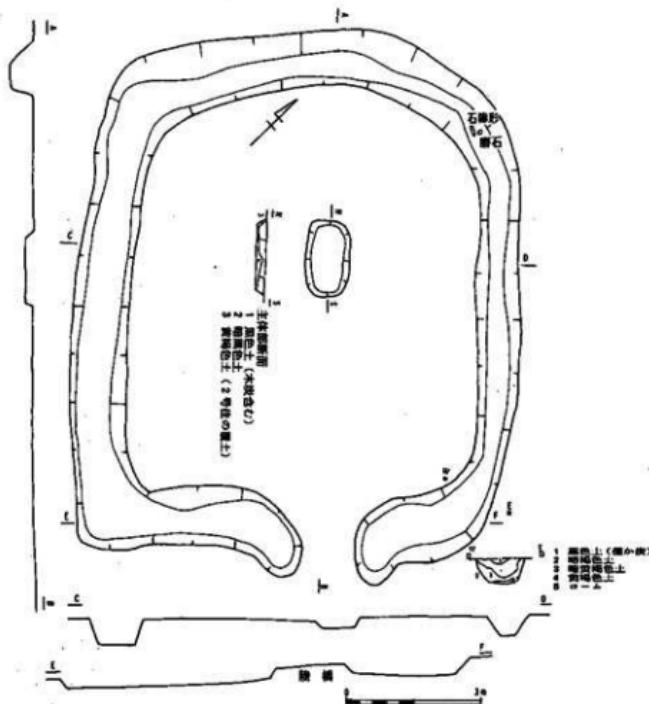
第35図 烏牛原中原遺跡運動公園用地内
1号住居址・壁穴址・土壤出土遺物
(1…1号住居址、2・3…壁穴址1号、
4…土壤1号、5…水田取入口水路跡出土)

(II) 方形周溝墓（運動公園用地内）

(1) 方形周溝墓（運）I号（第36図）

北環濠より南18m、東環濠より34mの位置にあり、東端西半分はⅢ号周溝墓の西溝と共に用いている。東西11.5m×南北9.8m隅丸方形の区域に、幅最小幅70cm、最大幅（カーブを除き）130cmの周溝をめぐらし、南東に向かって幅1.2mの陸橋がつき、この陸橋より西側の周溝は方形周溝墓（運）Ⅲ号の西溝の北側2分の1となっている。

主体部は、中心より西によっており、陸橋よりの直線上にある。東西1.7m×南北1mをはかる、周溝内側には縄文中期後葉後半の住居址2号住があり、住居址の調査は周溝墓をいためないため周辺だけの調査で終わっており、主体部土層調査も注意を要し、1層は黒色土（木炭を含む）、2層は暗黒色土、3層黄褐色土（2号住の覆土）。



第36図 烏牛原中原遺跡運動場造成用地内 方形周溝墓（運）I号

遺物（第39図）には39図1・2が周溝北東カーブ底部から出土している。1は長さ23.5cm、最大幅7.5cm、薄灰白色を呈し、南アルプス山系の石でマイロナイトと呼ばれる石とみる。重量1.4kg。2は1と同位置にならんで出土、磨石で、良く磨かれている。緑色岩とみるが、はっきりしない。径11cm、厚さ6.7cm、重量1080gの丸い石である。

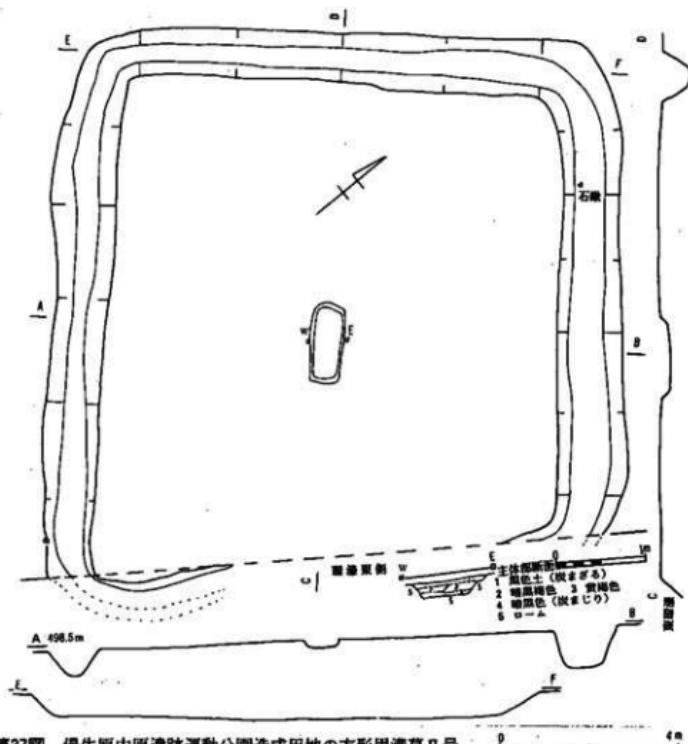
(2) 方形周溝墓（運）II号（第37図）

東側環濠の中央部に東端部溝がつき、北側環濠より西28mに北周溝がある。南北13m、東西13.2m（東側は環濠の調査を先に行い、この調査によって方形周溝墓の存在がわかった。柿の木を何本も掘り出したため全面が荒れ、抜根したあと土を出して、周溝の存在がはっきりした）。このため東側周溝の大半は削りとられてしまった。

周溝は整った隅丸方形をなし、溝幅は1.1m～1.6m、深さ60cm～80cmで表土からだと1m近い深さがあったとみる。

主体部は中央より僅か東寄りにあり、東西1.8m、南北0.8m、深さ40cm—（1層黒色土（炭まじり）、2層暗黒褐色土、3層黄褐色土、4層暗黒色土（炭まじり）、5層ローム）

遺物（第39図3）大形の石獣が北溝西側底部より出土しているが、基部を欠く、硬砂岩製で550g。



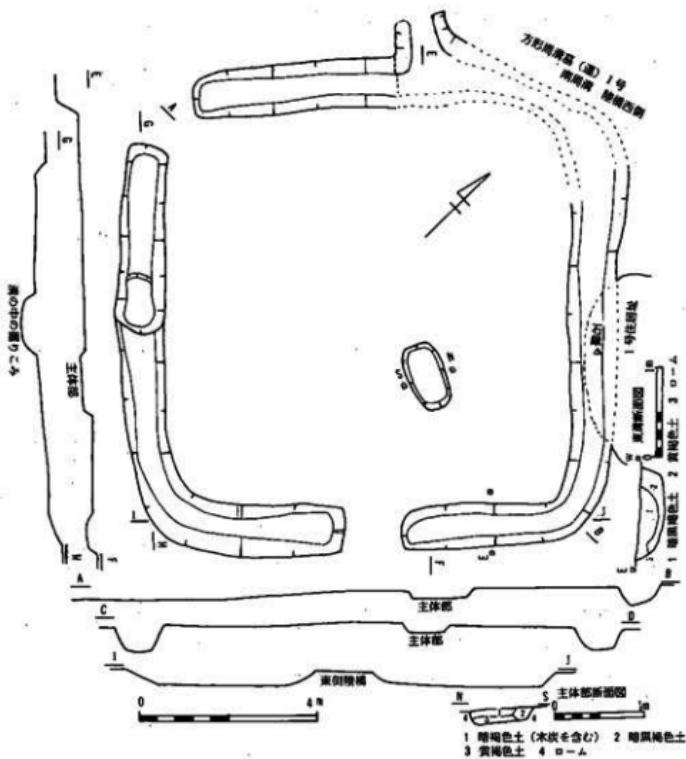
第37図 帰牛原中原遺跡運動公園造成用地の方形周溝墓II号

(3) 方形周溝墓（遼）Ⅲ号（第38図）

方形周溝墓（遼）Ⅰ号の南周溝の陸橋西側を共用し、北東側カーブを作り、東へ直線に下りて、北側周溝を作り、西周溝は2.5mで陸橋となって切れている。北周溝は、Ⅰ号周溝からの共用部が終って、約7mで南にカーブし、4mで陸橋となる。西周溝の南側の陸橋を1mはなれて、南周溝となり南を直線的に東に下り、8mでカーブを作り、北へ4mで陸橋となり、北側からカーブした陸橋と1.3mの陸橋で結ばる。東西11m×南北11mの隅丸方形をなしている。北周溝の中央からやや東によって周溝の3.5m幅に11号住居址の掘りこみになっていた。南周溝中央部に幅1.3mほどの深さ3cmの掘りこみがあるが、何であるか不明。

主体部は東側陸橋内より2.2m中に入り、さらに北側へ60cmよった所にあり、東西1.5m・南北90cmの小形で深さ30cmで、1層は暗黒褐色、2層は黄褐色土でロームとなる。

遺物には11号住居址が周溝部位置に住居址床面を掘りこんだ周溝底部より打石斧1個の出土をみた。長さ19.4cm、刃部幅6.5cm、重量375gあり、形態も整っており、石器である（第39図4）。

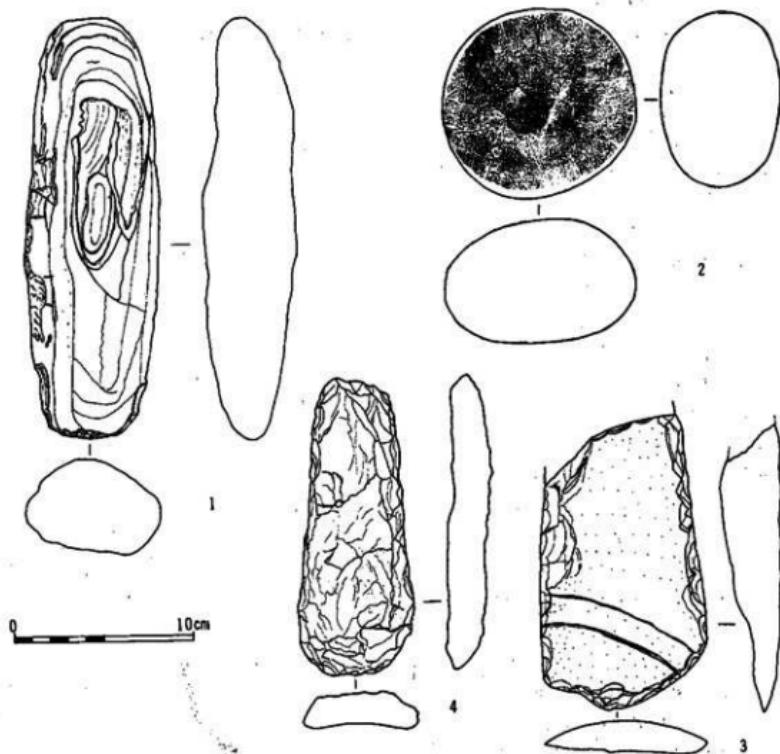


第38図 烏牛原中原遺跡運動公園造成用地内 方形周溝墓（遼）Ⅲ号

(4) 運動公園入口道路拡張部方形周溝墓(運) IV号(第40図)

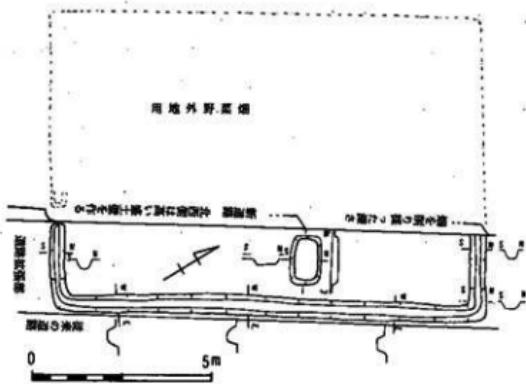
運動公園入口道路幅拡張に伴う調査で新しく検出された方形周溝墓である。用地北側の東西方向の道路より南40m入った所で、現在までの小・中学校の間を南北に通す道を倍の広さにする工事で、現道路面にするため表土を20~30cm削った所に黒色土の落ちこみで、周溝の存在を認め調査する。東側は拡張線に沿って僅か西よりに、長さ12m、幅40cm~60cm、深さ20~30cm。周溝が、南側・北側ともに西に直角に近いカーブをもって折れている。この長さ2.4mであるが南側は、用地外になるところで切れ陸橋が作られている。これより西は用地外となり、調査不能。

主体部は、北周溝より4.2m・南周溝より6.3m、東周溝より0.4mにあり、東西1.3m×南北0.9mの隅丸長方形をなし、深さ20cmで整った形態をなしている。周溝・主体部の覆土は黒色土のみで上層の土は工事で20cm以上削りとられており不明となっていた。また、主体部の位置からみて、用地外の西の野菜畑にもう1基主体部が存在しているとみる。



第39図 嵩牛原中原遺跡運動公園用地内 方形(円形)周溝墓出土遺物

- 1・2…方形周溝墓(運)Ⅰ号 北東周溝カーブ底部出土
3…方形周溝墓(運)Ⅱ号 北周溝西側底部出土
4…方形周溝墓(運)Ⅲ号 東周溝中央部底部出土

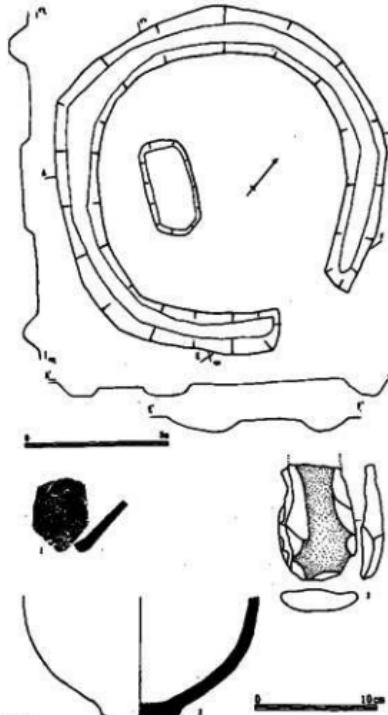


第40図 場牛原中原遺跡運動公園入口道路拡張部 方形周溝墓(運) IV号

(5) 昭和45年(1970) 場牛原農業改良事業に伴う農道開設予定地調査で検出された、円形周溝墓(運) V号(第41図)

円形周溝墓(運) V号は、運動場用地北側の東西方向の道路より運動場入口主要道路へ35m入った道路に2分の1は発掘調査後切られ、道路になった。この周溝墓については昭和46年(1971)3月発行「場牛原」喬木村教委に記載されている。これによると、円形周溝墓で径7.5m、東側に陸橋をもつ。周溝幅0.7m~1.2m、深さ30cm~60cm掘りこみ、幅・深さとも不同。周溝内部は径5.5mの円形で南3分の1の中央位置に210cm×110cm、深さ20cmの隅丸長方形の主体部がある。

遺物(第41図下図)周溝の南西側から1の高杯片、2は周溝北東側よりの出土で、胴下半部から底部までの中島式壺形土器である。3は同周溝内の打石斧で石鍬の基部を欠くものである。



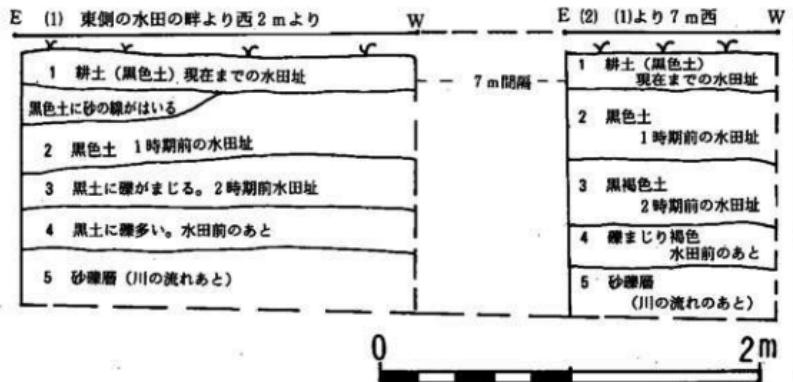
第41図
場牛原中原遺跡運動公園造成用地内 円形周溝墓(運) V号
(図上…円形周溝墓V号、図下…出土遺物)

(III) 水田址 (第42図)

水田跡の調査を、南環濠より南32mの地点に西12mの間を重機で直に掘り、土層を調査する。1・2区に別け、1区は東側の一段高位の田畦より2m離れた西側2mを、2区は1区より7m離れた西1mを調査。

1区の長さ2mの土層は、①の上層は耕土の黒色土が20cmで現在までの水田址で東側の耕土下に20cm、西1mまで、えがむ三角形に白い砂の線が黒色土の中に入った層があり、上の田の畦土の流れこみとみる。②層は①との境は堅く、黒色土であるが1時期前の水田址とみる。厚さ35cm前後である。③は黒色土に疊がまじり、2時期前の水田址とみられ、厚さ25cm~30cmあり、④は黒土に疊が多く、水田前のあととみられ、厚さ25cm前後で、⑤層は砂疊層となり、川の流れあとを示している。

2区は、①・②は1区と同じ層をなし、③は黒褐色土をなし、厚さ35cm余となり、2時期前の水田址あととみる。④は疊まじり褐色土、水田前のあととみる。厚さ25cm前後である。⑤は1区の5層と同じで、川の流れあとを示しており、南原と中原を切る浸透谷が、この水田址の西の先端よりはじまっている。



第42図 水田址土層図

IV 環

濠（第43図）

運動公園用地の全面積に対して、約4分の1余の1.1ha余に環濠をめぐらしている。環濠の3分の1は、運動公園の用地外の西側にある。

環濠は北側がやや不規則なカーブをなして西側に広がるが、全体からみると変形な長方形をなしている。濠の長さは、東側が75m、北側は120m、西側推定100m、南側推定150mである。（南側の東30mは水田の取入口になっており、ここに植えられた柿の木の掘りとりのため荒れ、不明となっていた。なお、不明の地点から20mは底部近くの濠跡を残すが、北側は3m以上地形が高く、長い年月の間に、埋められたり、流されたりして、浅くなっていた。）

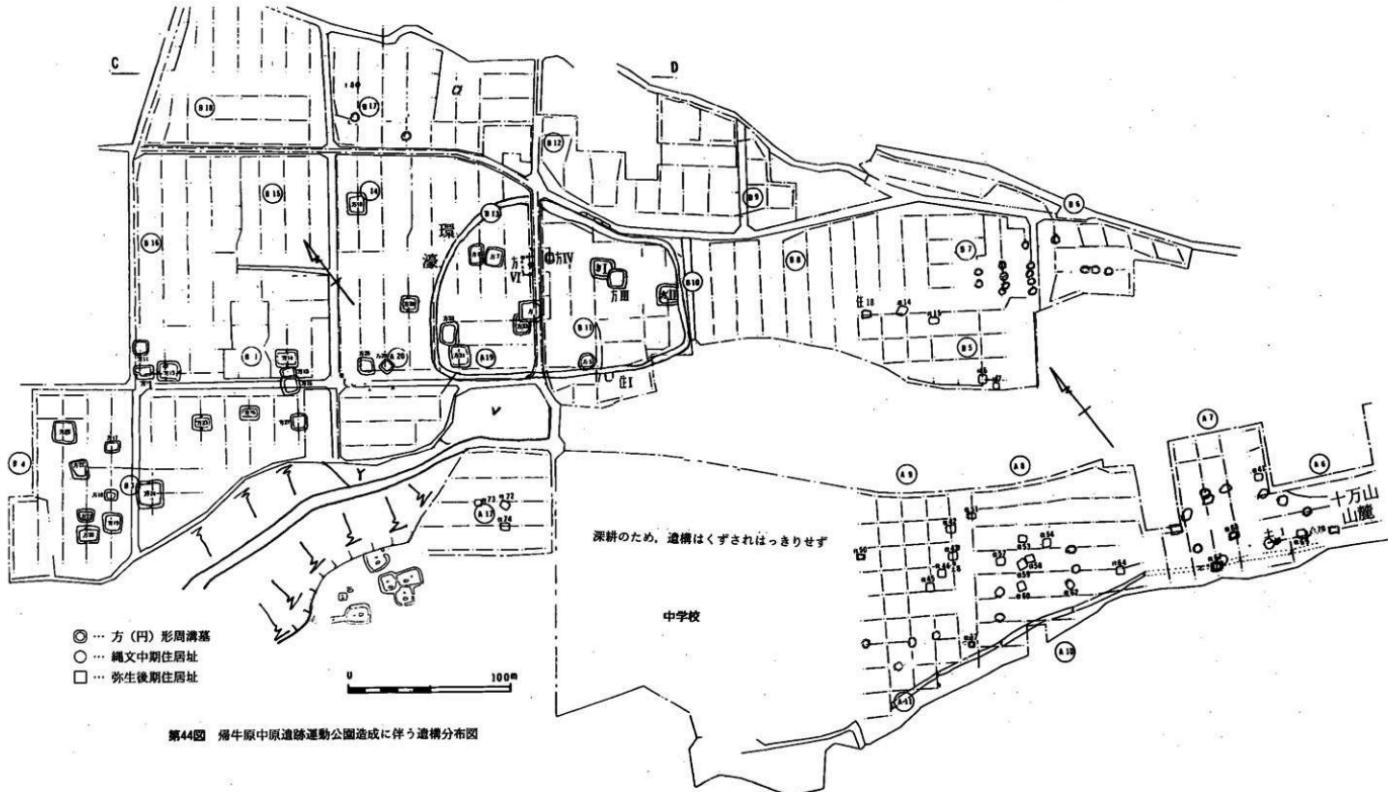
環濠の幅・深さを断面図でみると、（第44図）

- ① 東環濠西側（44図①W-E）、表土は削られており、残る耕土は西側で12cm、東側で30cm（東は道より上層が残る）、幅3.3m、深さは東西中央で2段となっており、西側50cm、中央32cm、東側50cm、土層は図参照。
- ② 東環濠北側（44図W-E）、東側の道路（中学生の通学道路で現在は運動場内となる。）に沿っており、幅3.5m、東側は耕土30cmを残す。上層は黒色土、2層は暗褐色土で東壁側に僅か黄褐色土があり、3層は15cm前後で暗褐色土があり、ロームとなる。変化の少ない土層である。
- ③ 北環濠（344図W-E）、運動場入口道路より東20m入った地点で東側は東西方向の道路に接し、道路と40cmの差があり、幅3.6m、土層は複雑であり、44図③W-Eを参照。
- ④ 西環濠（44図W-E）、運動場入口道路の北東境より南40m入った處より西に向かう幅2m程の農道をトレント調査し、西47mに環濠が検出された。幅3.9m、深さ1m、ほぼ上部の荒れはなく、もの状態を知ることができるとみられた。
- 土層図にみると、上層は耕土で黒色土、木灰まじり、深さ25cm~30cm、農道の両側はアスパラガス畑でこの根がはついていた。2層は暗褐色土で、中央部に僅か入りこんでいる。3層は土層の大半を占め、30cm~40cmの暗褐色土をなしている。4層は最下層で中央部で30cm両端と底部はローム層に接している。
- ⑤ 南環濠（544図S-N）、水道貯水池の南側を僅か離れて環濠が掘られている。幅3.6m、表土は黒色土で、厚さ30cm~33cmと厚く、貯水池の建設の際の土を埋めたとも思われる。表土下、1層は黒褐色土、20cm~25cmの厚さでほぼ平らの層をなす。2層は褐色で南側は30cm、北側は20cmの厚さをなす。3層は黄褐色で北側は30cm、南側は10cm内外と浅くなる。4層は10cm前後で、ロームにジャリ混じりであり、ロームとなる。

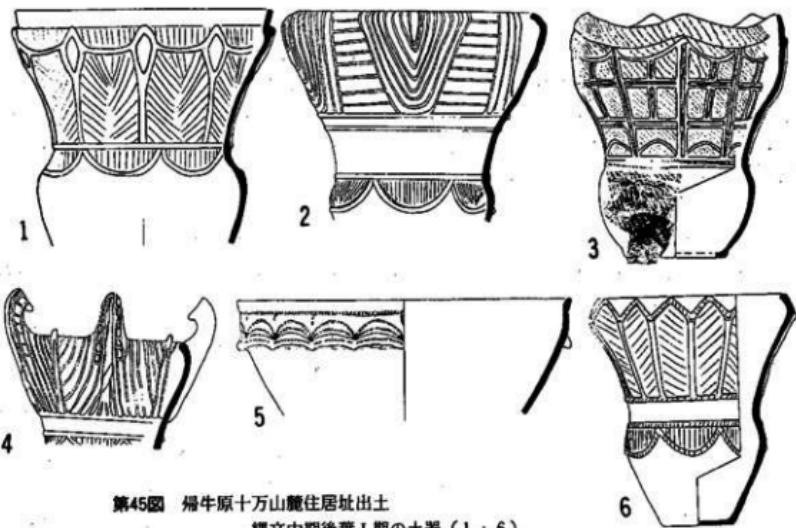
環濠の内部をみると（第43図）、東側環濠より8m~45m、北側環濠より15m~40mの間に繩文中期後葉後半の住居址15軒が接しあい、切りあって密集しているが、これらは環濠構築前のものであり、環濠に関係はない。ここで注目すべきは弥生時代である。

運動公園用地内で弥生時代で検出調査された遺構は、方形（円）周溝墓5基があり、この他に検出した道路拡張部に2基があったが、調査を無視して工事を進め破壊されてしまった。

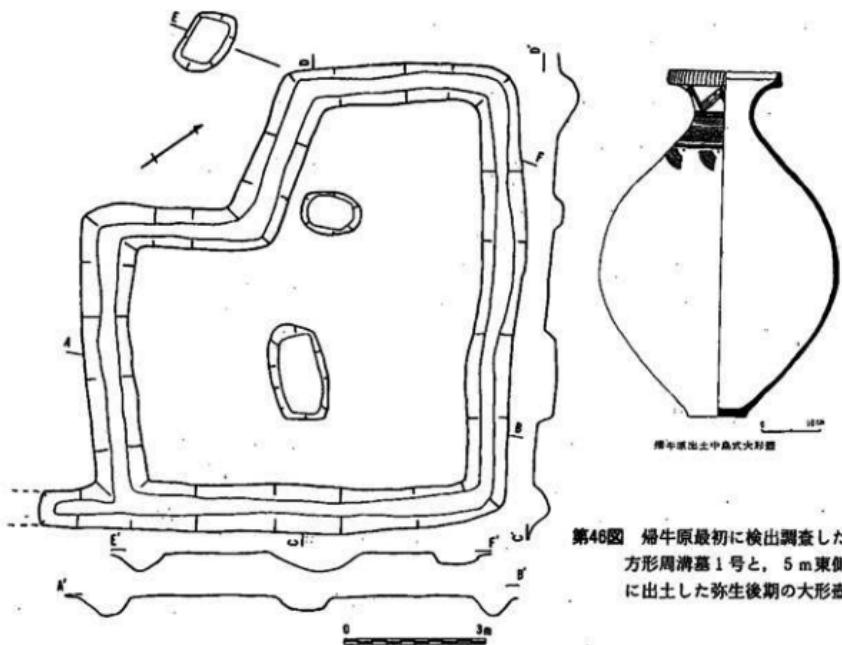
用地外で環濠内に4基の方形周溝墓が検出されているが、畠の中で調査は不可能であった。また、環濠内にあるが運動場用地からはずれている水道調整池建設時に、円形周溝墓2分の1を検出調査している。同時期の周溝墓であり、環濠内部のものである。



第44図 湧牛原中原遺跡運動公園造成に伴う遺構分布図



第45図 堀牛原十万山麓住居址出土
縄文中期後葉I期の土器 (1 : 6)



第46図 堀牛原最初に検出調査した
方形周溝墓1号と、5m東側
に出土した弥生後期の大形壺

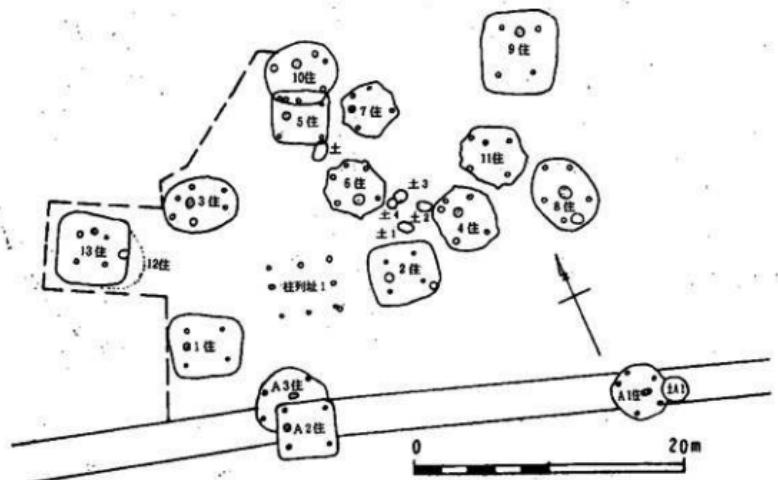
環濠外部の周溝墓は第44図にみる如く、環濠の西の段丘端部近くに集中しており、帰牛原方形周溝墓第1号（伊那谷3基めの検出調査）をはじめとし、21基の方形周溝墓が密集し、弥生後期中島式大形壙を1号の隣の13号周溝墓より出土している（第46図）。小学校プールに接した東側に5基の周溝墓があり、3号は北側の浸蝕谷に4分の1程削りとられており、弥生後期後に谷の浸蝕が進んだことがうかがわれる。南原1号周溝墓の北に縄文晚期住居址1軒がみられた。

方形周溝墓群の中に弥生時代の住居址はみられなかった。中原・南原の遺構をみると、（第44図参照）十万山麓には縄文中期後葉Ⅰ期の住居址10軒あり、出土土器は、第45図にみる如くキャリバー型の浅鉢を主体にし、細い粘土紐の貼布によって構成される口縁帯文で飾り、胴のくびれ部の下を櫛形文Eめぐらすが一般的文様構成である。同図5は大形の浅鉢で文様は口縁帯をめぐる1条の点線と、その下を幅4.5cm程の二段の波状の点線を、その下は単線を1条。さらに不規則なゆるい曲線を引く文様をめぐらしている。これら土器は、縄文中期後葉Ⅰ期とみたが、みかたによれば、縄文中期中葉終末期の土器ともみられる。

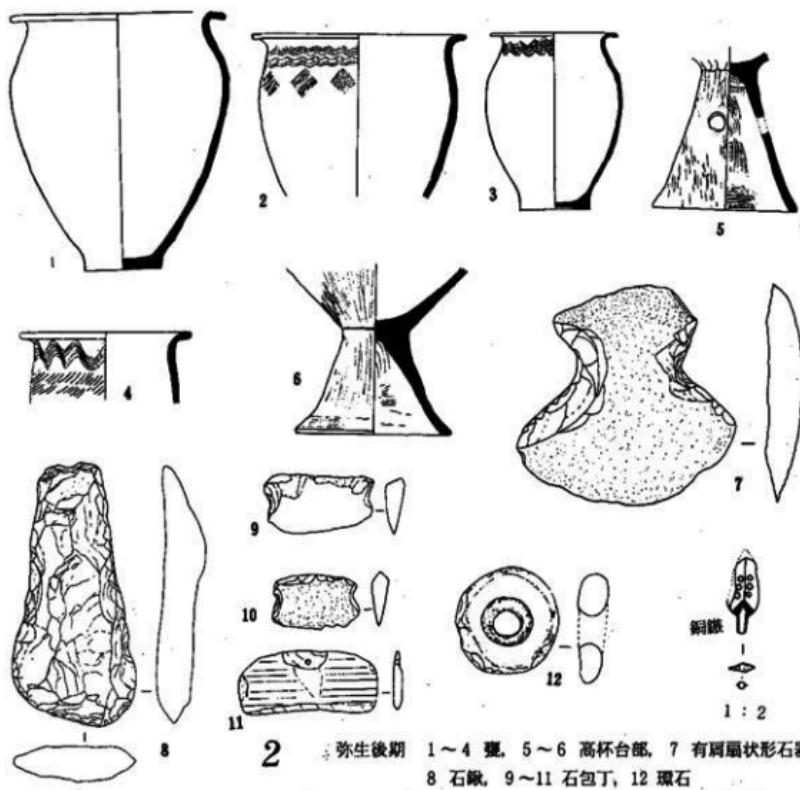
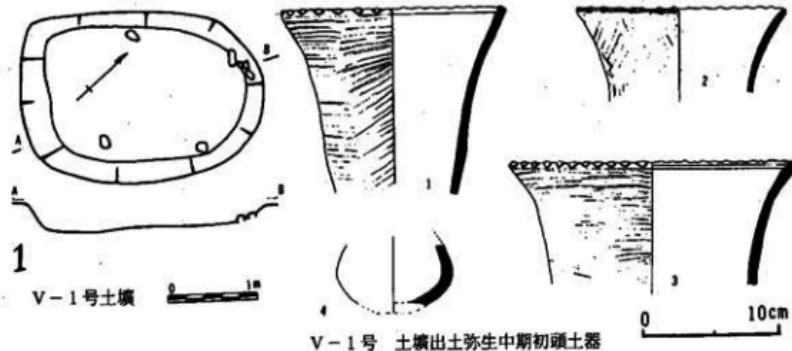
十万山地区の遺構図（第47図－1977調査）をみると、1970年農道用地調査を含めて、縄文中期後葉Ⅰ期住居址10軒、弥生後期住居址6軒と掘立柱建物址1棟に弥生中期初頭の土壤が調査されている。

縄文中期後葉Ⅰ期の土器は第45図で示しているが石器については環濠内部の1時期との石器と同形のもので、はぶいた。

弥生時代の土器を古のからみると第47図の農道用地調査で発掘したV1号土壤出土の土器である。第48



第47図 帰牛原十万山地区遺構図



第48圖 猪牛原南原十万山麓出土 弥生中・後期遺物

図1の1～3は深鉢、4は小形壺の胴下部とみる。弥生中期初頭の条痕文系Ⅲ期の土器で、口唇部にレンズ状の指頭圧縮し、胴部には横位・斜位の条痕文が施されている。当地方では寺所式と呼んでいる土器である。

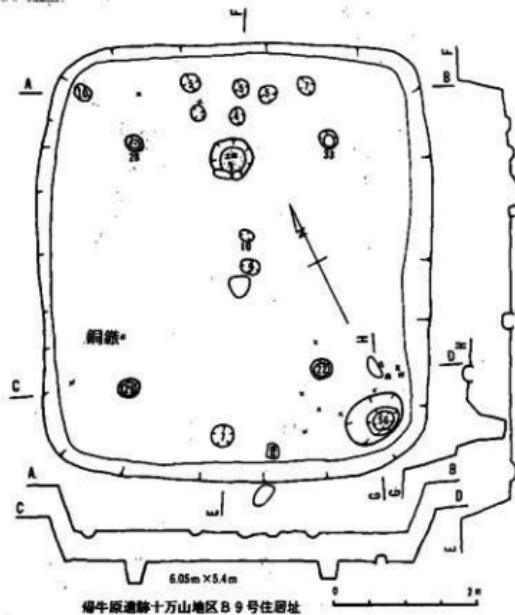
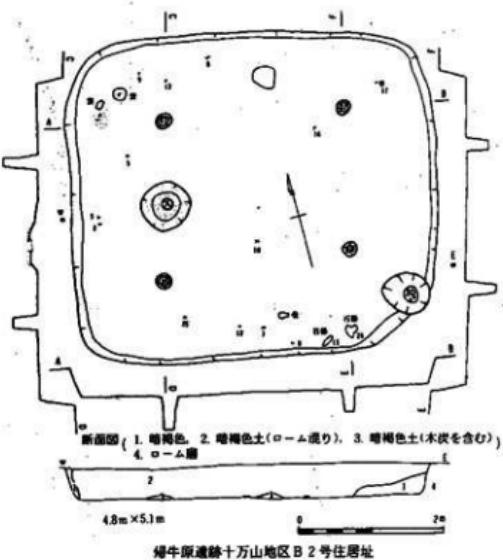
第48図2にみる土器は、弥生後期後半の櫛描文V期を主としている。第46図の大形壺は櫛描文V期の典型的な大壺である。これ等櫛描文系V・VI期の土器は一般的に中島式土器と呼ばれている。

第48図2の石器は中島式土器とともに出土したもので、農耕具が主になっており、7の有肩扁状形石器・8の石鋤は農耕具であり、9～11は石庖丁で穂摘み器であり、11は磨製品である。12は環石で飾り石である。

出土品の1級品とみる銅鐸は9号住居址床面に密着しており、調査時に少し欠いてしまった。両側に3個ずつの孔をもつ。

銅鐸出土をみた住居址は、6軒が一集落をなす9号住居址よりもある。(繩文中期後葉I期の住居址9軒を含めて第47図に入れてあるため住居址番号は時代別番号とは異なる。)

弥生住居址6軒の大きさをみると、9号住と他の5軒をみると $4.5 \times 5.2\text{m}$ が平均した大きさに対し、9号住は $6.05 \times 5.9\text{m}$ と特に大きくまた、土器を据えたとる穴が炉址の北側に6個並んでおり、土器も多く持っていたと予想され、集落の中心的な役割をなした家とみる。



第49図 弥生後期住居址の一般的な大きさと、特に大きな住居址の比較



第50図 地形的にみた帰牛原遺跡群弥生時代遺構分布図
(方周墓…方形周溝墓：基、住…住居址：軒、土…土壤：基)

V 地形的にみた帰牛原遺跡群——弥生時代遺構の分布を中心とした

帰牛原段丘の西端部は、南原・中原・城本屋等の地区に分かれており、遺構の内容・性格も地形的状況によって異なっている。

帰牛原は、東西に近い方向に連なる段丘で、標高490～535mの洪積中位段丘で、北から西側は比高60～70m前後の段丘崖となり、北の崖下には加々須川が流れ、西は天竜川の氾濫原をのぞみ、南は小川川の支流鞍馬沢が流れ、深い谷となり、川との比高35～70mとなり、段丘形成後の浸蝕の盛んであったことがわかる。

帰牛原の東方は伊那層よりなる丘陵となり、その一部が十万山として南側の鞍馬沢に沿って西にのびてきている。丘陵地と段丘面の東西は1,700m、南北最大幅550mを測り、台地の中間部はくびれて狭くなり、幅200m余となり、東の丘陵と西の段丘面とを分けている。

くびれ部の北東側の滝の沢の崖頭浸蝕による深い谷によって切られた舌状台地に城本屋遺跡があり、くびれ部の西に十万山裾に十万山遺跡がある。このくびれ部西の中央部はやや低地帯となり、東西方向に水田化されてきた。また、この水田化の西端は崖頭浸蝕による深い谷を形成し、南原と中原とに分けており、帰牛原遺跡における集落は、この低地帯をはさんで展開されている。

縄文中期後葉II・III期を中心とした集落は十万山裾で15軒・水田地帯を越えた北の台地に14軒の集落が、また今次調査した環濠内に15軒の集落が検出されている。城本屋遺跡では、昭和51年度(1976)に農業改良事業に伴う調査で縄文中期後葉III期を中心とした住居址45軒、後期3軒が発掘調査された。

縄文中期後葉期には集落を大きくして、食糧の採集・少ないながら畑作をはじめる時期となっていたともられる。このために集落の大きな結び付けの必要がこうした社会のありかたを生じたと考えられる。

弥生時代の住居址は後期が中心となり、水田地帯の低地帯をはさんで、台地のくびれ部より西の両側に5軒位を単位した集落がならぶ。

中学校用地内は、桑畠であり、桑の植替えによる深耕で遺構は破壊され不明となっていたが、遺物がみられ弥生住居址の存在は否定できない。また、県道大島・阿島線の阿島からの段丘の坂をのぼりきった所には、帰牛原浄化センター施設建設に伴う調査で、弥生時代中期末と後期住居址の2軒を用地東端部で発掘したが、これより西の用地の大部分は壁土とりのためローム層を深く掘りとったため、遺構は破壊されてしまっていた。

こうした破壊もみられるが、第50図にみられるように集落の展開がみられる。

中原台地西側半分と、小学校プールの所に方形(円)周溝墓38基があり、中原中心部近くに環濠をめぐらし、その中に12基の周溝墓が配置されている。

水田址を囲むように小単位の集落が配置されていることは、水田の管理・鳥獣害を防ぐために重要な役割を果すものである。

環濠が方形(円)周溝墓をとり巻く状態について疑問をもつものであり、集落の重要な人物の墓を守るものとみる点にも問題がある。

この点については、今後の問題であり、お教えを願うものである。

(佐藤 雄信)

図版 I



調査前、重機による柿の木こぎ



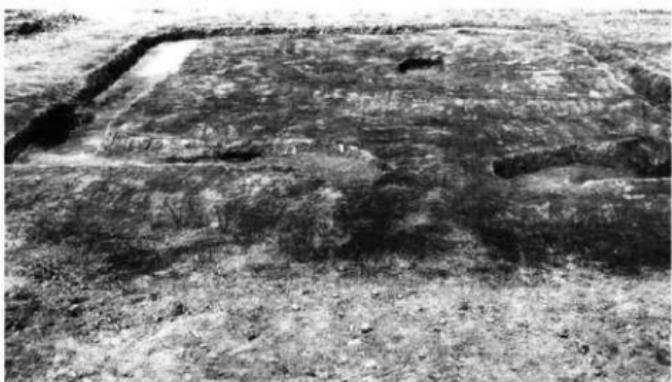
重機により 堅い土をとる



運動公園用地内の全体を掘り上げ

図版II 環濠





帰牛原方形周溝墓（速）Ⅰ号



帰牛原方形周溝墓（速）Ⅱ号



帰牛原方形周溝墓（速）Ⅲ号、上右はⅠ号周溝墓



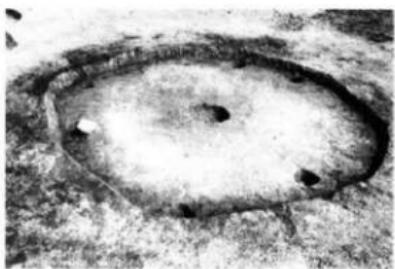
帰牛原 3号・4号(手前)住居址



帰牛原 5号・6号・8号住居址(下から)



帰牛原縄文中期後葉II・III期住居址群



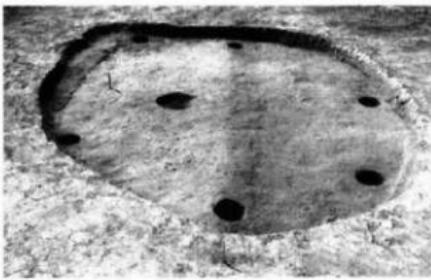
帰牛原 7号住居址



帰牛原 8号住居址



帰牛原9号住（手前）、10号住居址
右側は方形周溝墓（連）I号北溝



帰牛原11号住居址
上壁の直線は方周墓（連）II号の東溝



帰牛原15号住居址
右上は方周墓（連）II号の周溝に切られる



帰牛原1号住居址（弥生後期末）



水田の調査（土がくずれ十分に掘れなかった）



帰牛原 6 号住居址出土大形深鉢
(形がわかるよう破片が多い)

帰牛原 6 号住居址出土深鉢



帰牛原 6 号住居址出土土器片 右上は土偶胸部



帰牛原 6 号住居址出土土器の一部



帰牛原 6 号住居址出土深鉢片



帰牛原 6 号住居址出土土器



帰牛原出土特殊土器類

右上…4住 上中…6住土偶胸部 右上…13住
左下…6住 左下…右…12住 下中…12住



帰牛原 9 号住居址出土深鉢



帰牛原 9 号住居址出土深鉢



船牛原方形周溝墓（連）V号右側、西側は用地外
平成9年（1997）



方形周溝墓（連）
I号北周溝底部出土石器



調査にかかる



住居址発掘

調査組織

1. 調査委員会

東原美寅 喬木村教育委員会委員長
城下圭一 喬木村教育長（前）
宮下周一 喬木村教育長（現）
小池吉朗 喬木村教育委員
吉沢千春 喬木村教育委員
永井宗寿 喬木村教育委員
原五郎 喬木村文化財保護委員会委員長
黒川良一 喬木村歴史民俗資料館館長

2. 事務局

市瀬武文 喬木村教育委員会事務長
吉川文人 喬木村教育委員会社会教育係長

3. 調査団

団長 佐藤 遊信
調査員 牧内住子（足をいため、途中でやめる）
田口 さなゑ
調査補助員 柳沢 八重子・溝呂木 好雄

4. 作業員

牧内貞子	滝沢美子	木下幸栄	松島澄夫
牧内俊子	片桐米子	大平イナエ	大平和子
小池喜作	黒川良一	土屋隆男	小池ふみえ
加藤一実	木下ちせ子	東原まち子	桂南なん
佐々木義礼	佐藤いな江		

帰牛原運動公園調査報告書

1998年3月

発行 長野県下伊那郡喬木村教育委員会
印刷 株式会社秀文社
